千葉市居寒台遺跡

平成16年度調査

2005

協和不動産株式会社
財団法人千葉市教育振興財団

例　言

1. 本書は、千葉市花見川区浪花(なにわ)町981-1・2所在の居寒台(いさむだい)遺跡(花見川区-130)の発掘調査報告書である。
2. 調査は、協和不動産㈱による宅地造成に伴い、千葉市教育委員会生涯学習部文化課の指導のもと、財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 発掘調査及び整理作業の期間、及び担当者・調査面積は以下の通りである。

   本 調 査　平成16年5月17日～同年6月16日　　担当者：中山貴正

   調査面積：569.88㎡

   整理作業　平成16年6月17日～同年7月16日　　担当者：長原亘
4. 本書の編集及び執筆は、長原が行った。
5. 遺構の写真撮影は発掘調査担当者、遺物は長原がデジタルカメラで撮影したものを使用している。
6. 出土資料及び調査記録などは、千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。
7. 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の方々から御教示・御協力いただいた。記して謝意にかえさせていただきたい。

   千葉県教育庁生涯学習部文化財課、千葉市教育委員会生涯学習部文化課、協和不動産㈱、篠田房枝、白根義久（順不同・敬称略）

凡　例

1. 図中では、以下のような略号を使用している。

   住居跡：「住」、土壙：「土」
2. 遺構図中の標高は海抜高、方位は真北を示している。
3. 遺構実測図の縮尺は、以下の通りである。

   1/60：住居跡、1/40：土壙・住居跡カマド、1/4：土器・土製品、1/3：土器片、2/3：石器、1/2：金属製品　なお、図中スケールに適宜縮尺を記載している。
4. 遺構の番号は、調査段階と合致する。A～G区検出の遺構と重複する番号もある。
5. 第1図は、国土地理院発行「千葉西部」（S=1/25,000）、第2図は財団法人日本地図センター発行「明治15年測量第一軍管地方二万分一迅速測圖原圖覆刻版672（千葉縣下總國千葉郡畑村）と674（千葉縣下總國千葉郡馬加村）」を元図として合成し，1/25,000相当に縮尺を変更して使用している。

   第3図は、千葉市都市基本図（S=1/2,500）をS=1/1,200に部分拡大したものを元図として使用している。
6. 図版中で使用したスクリーントーンは以下の通りである。

遺構実測図		カマド構築材		柱　痕		炭　化　材	
遺物実測図		赤　彩		黒色処理		地　山	

目　　次

例言・凡例・目次
Ⅰ　調査に至る経緯 ……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 ……1
Ⅲ　調査の方法と基本層序 ……4
Ⅳ　過去における調査成果 ……6
Ⅴ　検出された遺構と遺物 ……8
1号住居跡 ……8
2号住居跡 ……8
3号住居跡 ……9
4号住居跡 ……9
5号住居跡 ……9
1号土壙 ……9
2号土壙 ……9
Ⅵ　まとめ ……21

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図① ……2
第2図　周辺遺跡分布図② ……2
第3図　遺構配置図・基本土層図 ……5
第4図　遺跡内の調査区位置図 ……7
第5図　1号住居跡 ……10
第6図　2号住居跡（新） ……11
第7図　2号住居跡（旧）・カマド・ ……12
第8図　3号住居跡 ……13
第9図　4号住居跡・1・2号土壙 ……14
第10図　1・2号住居跡出土遺物 ……15
第11図　2・3号住居跡出土遺物 ……16
第12図　3・4号住居跡出土遺物 ……17

表 目 次

第1表　周辺遺跡一覧 ……3
第2表　平成3年度Ｂ区検出住居跡時期別一覧 …6
第3表　遺跡調査履歴一覧 ……6
第4表　1号住居跡遺物観察表 ……17
第5表　2号住居跡遺物観察表 ……18
第6表　3号住居跡遺物観察表 ……19
第7表　4号住居跡遺物観察表 ……20

写真目次

図版1　遺跡付近航空写真1・2
図版2　調査風景、1・2号住居跡
図版3　2・3・4号住居跡
図版4　1・2号土壙、基本層序、1号住居跡出土遺物(1)
図版5　1号住居跡出土遺物(2)・2号住居跡出土遺物
図版6　3・4号住居跡出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯

本遺跡の発掘調査は、協和不動産㈱による宅地造成事業に伴う調査である。平成16年1月22日付で篠田房枝から千葉市花見川区浪花町981-1・2の事業予定地内について、千葉市教育委員会教育長宛に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が提出された。市教育委員会生涯学習部文化課（以下、文化課と表記）は、平成14年度の国庫補助事業（市内遺跡）による調査成果をもとに、照会地が居寒台遺跡として周知される範囲に含まれ、遺構が存在することを確認の上、「遺跡の所在する旨」、平成16年1月27日付の15千教文（埋）第227号で回答した。これを受けて文化課と事業者との間で遺跡の取り扱いについて協議した結果、照会地2,447.99㎡の内埋蔵文化財への影響が及ぶと考えられる範囲596.88㎡に関して、記録保存を目的とする本調査を実施することで合意した。この結果、平成16年5月17日～6月16日の期間、千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センターに委託して発掘調査を実施することとなった。（文化課）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

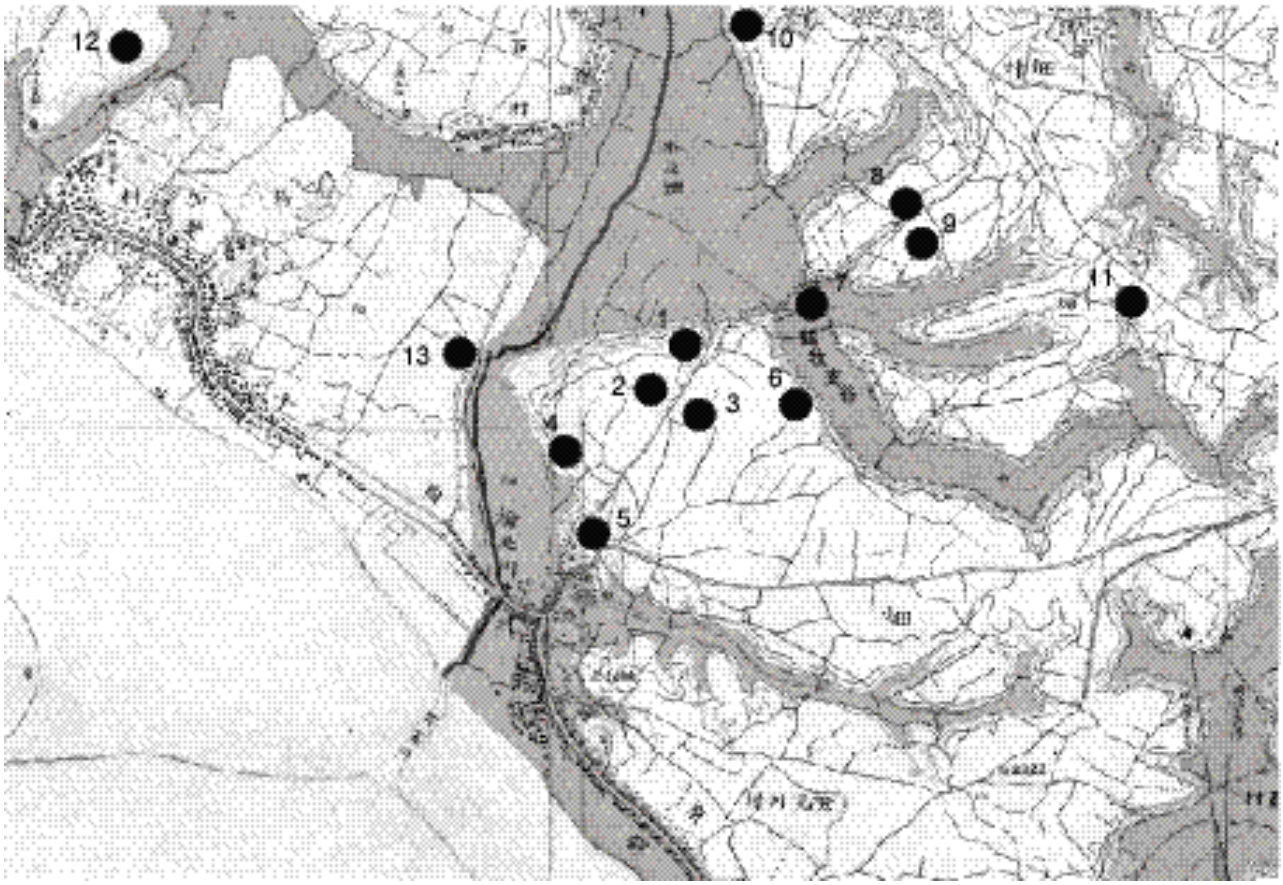
千葉市は、房総半島の北半に広がる下総台地の南西部に位置する。市域の大部分が台地で占められており、各時代の多くの遺跡が台地上に展開している。河川に大規模なものはないものの、市域北部に印旛沼に注ぐ鹿島川があり、東京湾に流入する村田川・都川・浜野川などとこれらに合流する支流が樹枝状に展開しながら東京湾岸の河口付近に小規模な沖積平野・海岸低地を形成している。因みに、市域の河川の流れが東京湾側と印旛沼側とに分かれるのは、市北西部の花島町域から南東部の土気町にかけて延びる分水界が存在するためである。

本遺跡の西側を流れる現在の花見川は、江戸時代から幾度かの開削工事を経て、昭和30年代に開通した印旛沼からの放水路（印旛放水路）である。また、「花見川」の名称は、千葉実録に掲載される和歌の中などにみられ、中世には認知されていたことがわかっており、旧来は現在の放水路の流路と重なる花島支谷の他に犢橋支谷などから集水して東京湾に流れ込んでいたようである。

遺跡は、千葉市の北西部ＪＲ総武線新検見川駅の北北西約800m、花見川区役所から南へ約500mほどの位置で、印旛沼から東京湾への放水路として開削された花見川下流域の左岸、花見川本谷を北西側、本谷から分岐する通称「鶴牧支谷」を東側に望む標高約17～19mを測る台地上に所在する。

遺跡周辺には、同一台地上に直道遺跡（2）・横塚遺跡（3）・大久保貝塚（4）・瓜堀込遺跡（5）・玄蕃所遺跡（6）が所在する。直道遺跡は、平成3年度と6年度に調査が実施され、古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡22軒・掘立柱建物跡20棟などが検出された。本遺跡と隣接しており、同時期の遺構も検出されていることから密接な関係が伺えるが、遺構の主体となる時期は8世紀以降であり、同一台地上でありながら時期によって遺構の形成範囲が移動していたと想定される。横塚遺跡は、平成3年度に実施した発掘調査（現在の花園公民館）により奈良時代の竪穴住居跡1軒と時期不明の溝状遺構2条が検出された。大久保貝塚は、古墳時代の貝塚・散布地として周知されているが、平成元年度に実施した発掘調査により奈良時代の竪穴住居跡が検出された。瓜堀込遺跡は、平成10年

第1図　周辺遺跡分布図①



第2図　周辺遺跡分布図②

度に確認調査が実施され、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡8軒が確認された。玄蕃所遺跡は、平成6年度に調査が行われ、細石刃を伴う石器ブロック1箇所、縄文時代前期の竪穴住居跡1軒、平安時代の竪穴住居跡1軒などが検出された。鶴牧支谷には、縄文時代後期とされる丸木船や大賀ハスの種子が出土した落合遺跡（7）〔旧称：検見川泥炭遺跡〕が知られている。鶴牧支谷を挟んだ北側の台地上には、御林遺跡（8）・上鶴牧遺跡（9）・宮脇遺跡（10）などで発掘調査が実施されている。御林遺跡は、平成10年度の発掘調査で古墳時代中期の竪穴住居跡1軒、奈良時代の竪穴住居跡5軒などが検出された。上鶴牧遺跡は、平成5年度に実施した発掘調査で古墳時代前期と中期の竪穴住居跡が各1軒、後期の竪穴住居跡2軒、奈良時代の竪穴住居跡2軒などが検出された。宮脇遺跡は、昭和47年度の発掘調査で古墳時代前期の竪穴住居跡2軒、中期10軒、平安時代の竪穴住居跡1軒などが検出された。鶴牧支谷の最奥部に位置する箕輪遺跡（11）でも、昭和58年度の発掘調査でナイフ形石器を伴う石器集中ブロックが2箇所、古墳時代前期の竪穴住居跡9軒、中期11軒、奈良時代の火葬墓2基などが検出された。鶴牧支谷周辺には、古墳時代前期と中期の集落の調査事例が集中しており、市域で当該期の集落の動態を検討する上で重要な地域であるといえよう。

花見川河口部の海岸低地を隔てた北西約2㎞先の台地上には、約300軒の古墳時代後期を主体とする竪穴住居跡などが検出された上ノ台遺跡（12）が所在している。上ノ台遺跡は、花見川河口付近で発掘調査が実施された遺跡の中でも、集落のほぼ全域を調査している点で突出した情報量を提供している遺跡である。その成果の中に、6世紀後半から7世紀前半頃を中心として、埼玉県北部から群馬県平野部などに広く分布すると理解されている有段口縁の坏や甕が比較的多く含まれていることが知られており、本遺跡でも同様の遺物が相当数含まれていることが平成13年度調査の報告書で指摘されている。千葉県域における有段口縁を持つ土器の分布は東京湾岸地域に多くみられ、市域では花見川河口地域の砂州を見下ろす台地縁辺部に立地する遺跡に比較的集中する傾向が伺える。本遺跡と上ノ台遺跡は海岸低地を挟んで2㎞程離れているものの、出土遺物の中に共通点を見出すことができることから、遺跡間相互の比較検討などの必要性もあり、相互に重要な遺跡であるといえよう。

第1表　周辺遺跡一覧

№	遺跡名	遺跡№	時　　代（時期）	調査年度	備　　考
1	居寒台遺跡	花見川区130	古墳時代後期～平安時代	一覧表参照	
2	直道遺跡	花見川区131	古墳時代後期～平安時代	H3･6	
3	横塚遺跡	花見川区134	奈良時代	H3	
4	大久保貝塚	花見川区129	奈良時代	H1	古墳時代貝塚
5	瓜堀込遺跡	花見川区132	古墳時代後期～平安時代	H10	
6	玄蕃所遺跡	花見川区135	古墳時代後期	H6県セ	
7	落合遺跡	花見川区102	縄文時代後期？		丸木船・蓮実出土
8	御林遺跡	花見川区92	古墳時代中期・平安時代	H3県セ・H10	
9	上鶴牧遺跡	花見川区93	古墳時代前期・中期・後期	H5	
10	宮脇遺跡	花見川区77	平安時代	S47	
11	箕輪遺跡	花見川区100	古墳時代前期・中期	S58県セ	
12	上ノ台遺跡	花見川区27	古墳時代中期・後期	S47･48･55	
13	愛宕山古墳	花見川区76	古墳時代後期		海岸低地の方墳

現在の幕張の中心街が形成されている場所は、周囲の海岸低地と比べ海抜高度がわずかに高く、海岸線に平行して形成された微高地状の低地となっている。この微高地は、海の波や潮流の変化などによって形成された砂浜が成長した「砂堆・砂州」にあたる。この微高地上の発掘調査は、街の造成時期が早かったこともあり全く行われておらず、遺跡の存在が認知されていない地域である。しかし、居寒台遺跡の立地する台地先端部から花見川を挟んで対面する微高地先端部に古墳時代後期の方墳である愛宕山古墳（13）が存在していたことがわかっており、微高地上の開発が皆無であったとは考えにくく、微高地平坦部に集落などの遺跡が展開していた可能性も考慮に入れておく必要があろう。また、堆積した砂が風によって運ばれ小高い丘状になったものが砂丘であるが、居寒台遺跡の立地する台地上にも風成砂による砂丘が台地の一部を覆うように発達していることが発掘調査でも確認されている。居寒台遺跡のＦ区やＥ区ではところによって2mを超す厚みの砂層が確認されており、その他の調査区でも0.25～0.5m程の厚さの砂層が確認されている。台地上でも海に面していない後背湿地側の緩斜面まで風成砂が及んだ原因については解明されていないが、検出された古墳時代後期から平安時代の竪穴住居跡の埋土中に砂の混入がなく、遺構の埋没後の堆積層を覆うように砂層が確認される場合が多いことから、平安時代以降に形成された砂層が広く台地上に堆積すると予想されている。

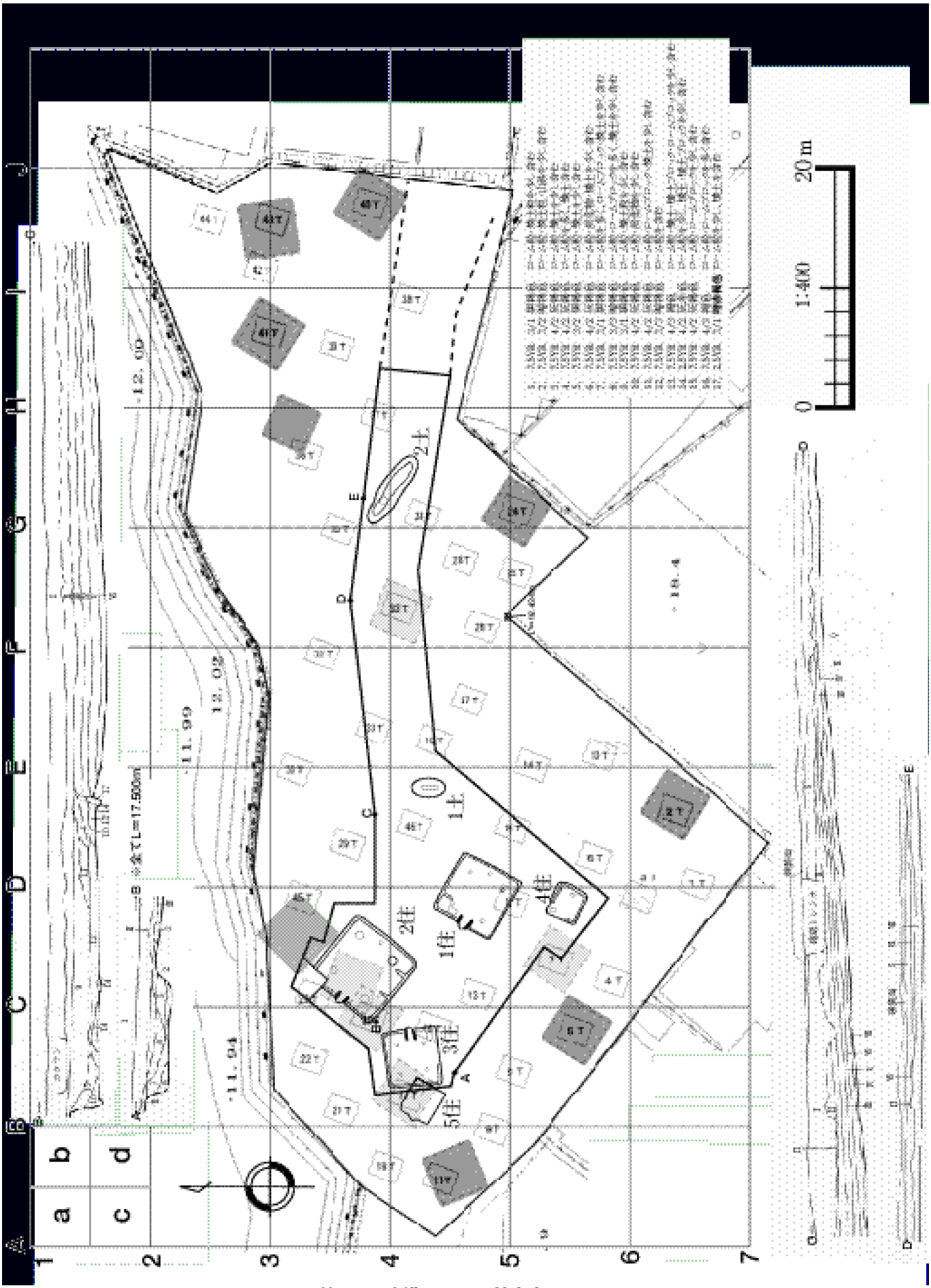
なお、本遺跡名は、「いさむだい」と呼称しているが、地番割図に記載されている字名は「いしやぶだい」となっており、遺跡名付与の段階での読み違いからの誤認と推測される。

Ⅲ　調査の方法と基本層序

本遺跡は、今までに8地点・11次に及ぶ調査が実施されており、各々便宜上Ａ～Ｈ区としてきた。今回の調査地点は、平成14年度に確認調査を実施したＨ区の範囲の内、今回の開発に直接関わると考えられた部分にあたる。なお、今次調査は、調査期間をもとにすると12次の調査となる。

調査は、確認調査で遺構が確認された部分の表土除去を優先的に実施し、遺構を再検出した。その過程において未確認の遺構が検出された場合、調査区の漸次拡張を実施する方法を採用した。調査対象範囲内にある境界杭などとの位置関係を把握しつつ調査区を拡張したことから、設定した方眼は磁北を意識しつつも方位や位置関係は公共座標系などに全く準じない結果となった。一応、東西方向にＡ～Ｊ、南北方向に1～6のラインを10m方眼に設定し、各10m毎のグリッド内を更に5m毎の小区画（北西角をａ杭、その東側をｂ杭、ａ杭の南側をｃ杭、その東側をｄ杭）に四分割して区割りとした。調査に使用した標高は、事業者が設置した事業予定地内の工事用ベンチマーク（ＢＭ）の18.434mを基準としているが、公共基準点の標準高との整合性は確認できなかったので正確な値とは断言できない。

基本層序は、Ⅰ層（10ＹＲ5/2灰黄褐色土層：砂層。最上部に舗装用の砕石があり、φ3～5㎜の小石を全体に含む）、Ⅱ層（7.5ＹＲ3/1黒褐色土層：φ1㎜以下のローム粒を全体に含む）、Ⅲ層（7.5ＹＲ4/4褐色土層：新規テフラ層。住居跡はこの層を切って構築。上下の層に比べ土色が明るいので区別は明瞭）、Ⅳ層（7.5ＹＲ4/2灰褐色土層：細かいローム粒を少し含む。Ⅴ層との区別は不明瞭）、Ⅴ層（7.5ＹＲ3/2黒褐色土層：細かいローム粒を少し含む）、Ⅵ層（漸移層）、Ⅶ層（ソフトローム層）である。なお、ハードローム層までの掘削は実施していないので深さは不明である。



第3図　遺構配置図・基本土層図

Ⅳ　過去における調査成果

本遺跡における過去の調査事例は、第3表の一覧にあるとおりである。これらの中で、報告書の刊行に至っているのは、平成8・13年度（D区・E区）と本報告書のみで、その他の成果は諸般の事情により、調査成果の整理・公表は行われていない。また、本報告書作成中にD区に隣接する地点の確認調査が実施され、この地区をＩ区とすることとなった。この調査成果は、千葉市教育委員会文化課が本年度末に刊行予定の『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書-平成16年度-』を参照されたい。

今回、平成3年度Ｂ区の調査成果を散見する機会を得た。未整理なので図面等の用意はできなかったが、遺構出土遺物のおよその時期と特徴的な遺物の有無について略述しておきたい（第2表）。

Ｂ区の調査では、古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居跡が年報等の公式記述では30軒検出されていることになっている。調査時の遺構名称がA-001～013・015～029の28軒分が該当し、新旧関係があるとされる5軒の住居跡のいずれかの重複が分離・計上され30軒とされたと想像される。住居跡の新旧関係に関わる詳細は未検討なので、包含された遺物の帰属に曖昧さは残るが、下限にあたると考えられる遺物からおおよその時期を判断し、第2表にまとめてみた。

第2表　平成3年度Ｂ区検出住居跡時期別一覧

時　期	遺構名	備　考
6世紀後半	A-025（旧）	有段口縁坏を含む住居跡：A-025（旧）・004・005・006・007・008・009・012・017・019・022・023 有段口縁坏と比企型坏が共伴する住居跡：A-022 有段口縁坏と駿東型甕？が共伴する住居跡：A-008
6世紀末葉～7世紀初頭	A-001・004・009・017・019・020・022・023	
7世紀初頭	A-008・029	
7世紀前半	A-005・007	
7世紀後半	A-012	
7世紀末葉	A-011	
7世紀代	A-006	
7世紀末葉～8世紀初頭	A-016・021	須恵器香炉型土器を含む住居跡：A-021
8世紀代	A-002・010・013・015・024・025（新）・027	
時期不明	A-003･018･026･028	

第3表　調査履歴一覧

調査区	調査年度	調査機関	調査形態	調査期間	調査面積(㎡)
A区	昭和55年度	千葉市遺跡調査会	本調査	19801204-19810124	2,200
調査成果	古墳時代竪穴住居跡12軒、平安時代竪穴住居跡5軒、時期不明溝状遺構4条、土坑14基				
B区	平成3年度	(財)千葉市文化財調査協会	確認調査	19910902-0912	300/2975.17
			本調査	19911014-19920131	1,650
調査成果	旧石器時代石器集中区1箇所、古墳～平安時代竪穴住居跡30軒、掘立柱建物跡20棟、時期不明溝状遺構3条				
C区	平成3年度	千葉市教育委員会文化課	確認調査	19920219	60/614
調査成果	奈良・平安時代竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡2棟（確認調査成果なので時期及び軒数は確定ではない）				
D区	平成8年度	(財)千葉市文化財調査協会	確認調査	19960805-0808	160/1,614
		居寒台遺跡発掘調査団	本調査	19970324-0421	1,088.4
調査成果	古墳時代竪穴住居跡1軒、奈良時代竪穴住居跡1軒（確認調査時の成果として、竪穴住居跡１軒が未調査である）、土坑1基、溝状遺構2条				
E区	平成13年度	(財)千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター	確認・本調査	20011101-1214	400/3,074
					200
調査成果	古墳時代後期竪穴住居跡1軒、時期不明掘立柱建物跡1棟				
F区	平成14年度	(財)千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター	確認調査	0021101-1105	19/188.46
調査成果	時期不明溝状遺構1条				
G区	平成14年度	(財)千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター	確認調査	20021106-1115	74/732.39
	平成15年度	千葉市教育委員会文化課	一部本調査	2003	
調査成果	古墳時代後期～平安時代竪穴住居跡16軒、ピット16基、土坑8基、時期不明溝状遺構4条（本調査では、住居跡4軒の一部、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構2条の調査を実施）				
H区	平成14･16年度	(財)千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター	確認調査	20021118-1127	230/2447.99
			本調査	20040517-20040616	569.88
調査成果	縄文時代土壙1基、古墳時代後期竪穴住居跡3軒、土坑1基、奈良・平安時代竪穴住居跡2軒（確認調査時の成果として、竪穴住居跡8軒、土坑数基が未調査）				

7.3
8.6
8.5

このＢ区の結果から6世紀末葉頃から8世紀まで継続的に営まれていた集落だったと予測される。これらの中に有段口縁坏が在地産の遺物に共伴する住居跡が12軒含まれており、外来系土器の含有率が比較的高い遺跡であることがわかる。なお、A-008の駿東型甕（?）は、胎土が非在地的で頸部内面に明瞭な屈曲した接合痕がみられる土器だが、特徴である木葉痕のある底部は確認できなかったので再検討が必要と考えている。以上のことから、本遺跡が他地域との接触・交流などが盛んな集落であったと想像され、この地域の古代の特徴をふまえる上で重要な遺跡であると考えられる。

Ⅴ　検出された遺構と遺物

今回の調査では、縄文時代の土壙1基、古墳時代後期の竪穴住居跡3軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、時期不明の土坑1基が検出された。なお、奈良・平安時代の竪穴住居跡の1軒（5号住居跡）は存在の確認のみで、遺構の掘削は全く行っていない。これら以外に平成14年度の確認調査で確認され、今回調査の対象外となった住居跡が11軒と土坑が数基あるが、その住居跡の内の2軒は調査区内で確認されるべきであったが、再検出されなかったことから、未調査の住居跡実数は9軒となった。

1号住居跡　4C-dと4D-c区で検出された。平面形は方形で、一辺5.5m・深さ0.4～0.55mを測る。主軸方位はN-62°-Wを示す。床面はハードロームまで掘り込まれ、貼り床をして平坦化しているが、北側へ微妙に傾斜している。壁溝はカマド付近を除き全周し、主柱穴Ｐ2の南側に間仕切り溝が掘られている。カマドは北西壁側中央部、カマドの左側（北東角）に円筒形の深さ0.43m程の貯蔵穴が敷設される。主柱穴は、Ｐ1～4の4穴で、検出時に柱痕跡が判別できた。更に、カマドの対面にＰ5（階段用ピット？）が検出された。主柱穴の内側及びカマド・貯蔵穴周辺の床面が著しく硬化していた。なお、床面全体に炭化材が検出されたことから、焼失家屋と考えられる。

遺物は、3・5・13を除き細片からの復元である。5・6は、比企型坏である。11は、胎土中に石製の白玉が混入されている珍しい例である。細片なので混入された白玉が意図的に配されたものか、単なる混和剤として混入されたものかは不明だが、少なくとも2箇所の痕跡があり、第10図・1号住居跡の11の俯瞰図から受ける印象としては、口縁端部からの距離が等距離なので意図的に配されていたのかと考えてしまう。2箇所間の距離は約2㎝であり、仮に意図的に円形に配した場合、15個位の玉数となろう。4は有段口縁坏である。総体的に6世紀末～7世紀初頭頃に比定できる遺物が多い。

2号住居跡　3C-c区が中心に検出された。平面形は方形で、一辺6.5m・深さ0.45～0.5mを測る。主軸方向はN-55°-Wを示す。掘方は、北東側2/3がⅣ～Ⅵ層の堆積土中までしか掘削しておらず、床面はハードロームまで達せずに、その上に貼り床をして平坦化している。壁溝は全周しており、南西壁側に2箇所に間仕切り溝が掘られている。カマドは北西壁側中央部に敷設される。主柱穴はＰ1～4の4穴で、カマドの対面にＰ5が検出された。主柱穴の内側とカマド・Ｐ3付近の間仕切り内の床面が著しく硬化していた。北角は、確認調査により遺構の一部が破壊されていた。また、北東壁側に調査区外に延びる住居跡のような遺構が検出されたが、性格は不明である。また、貼り床下に旧住居の壁溝と主柱穴4穴、Ｐ5が検出された。壁溝の一辺は、推定で5.5m程である。カマドと北東壁側の壁溝は新住居跡のものと重複しているようなので、南東・南西壁側を0.8～0.9m程拡張したようである。

土師器坏は、4・5を除き細片からの復元である。6～8の坏は、口縁端部に凹線状の内傾する明瞭な段を有し、胎土が在地産ではないように感じられる。12の外面は、口縁部が黒彩、体部が無彩で明確に区別している。1・2の須恵器片は、猿投窯・東山44号窯（6世紀末葉～7世紀初頭）の土器とよく似る。19の高坏は、碗型の坏部と脚部を別に製作後に接合した痕跡が明瞭であった。

3号住居跡　4B-ａ・ｂ区が中心に検出された。平面形は方形で、一辺4.8m・深さ0.4m前後を測る。主軸方向はN-84°-Eを示す。床面はハードロームまで掘り込んだまま平坦化している。壁溝は南東角と南壁半分以外に廻る。カマドは東壁側中央部、南東角に方形で深さ0.84mの貯蔵穴が敷設される。貯蔵穴の西辺と北辺側に幅0.2m前後の地山削り出しの凸部区画が形成される。

主柱穴はP1～4の4穴で、カマドの対面にP5、斜向かいにP6が検出された。柱穴は総じて規模が小さく、浅い。主柱穴の内側とカマド・貯蔵穴、P5・6付近の床面が著しく硬化していた。

土師器坏は、1・2を除き細片からの復元である。その他の器形も9・14を除き破片からの復元である。2の坏は完形で、典型的な須恵器蓋模倣坏であり、地の色調が橙色を呈する外来系の土器である。器壁に黒色の付着物（炭化物？）が斑に全面にみられるが、被熱はしていない。1・4・5・6のように坏としてはやや深めの碗型の坏が多い。10は、厚みと断面下端部の接合痕の具合から高坏の坏部片と判断した。9は完形の高坏で、被熱による劣化によって調整が不明瞭である。9と1の坏、15の甕底部破片、22の軽石は、カマド内からまとまって出土しているが、9と15は明瞭な被熱がみられるものの、1と22は全く被熱がみられない。これらは、前者が支脚や咬ましのようなカマド燃焼時に関わる付随品として転用されていたもので、後者は燃焼に関わらずにカマド廃棄時に一連のものとして置き捨てられた結果と想定したい。16は、口縁部と底部の破片の合成図だが、内外面とも際だった黒色化が施された土器である。断面内まで黒色化し、器壁には磨いてないのに何故か光沢感がみられる。口縁端部の造りは粗く凹凸が激しいが、焼き締まりが良いので粗製にも感じられない。

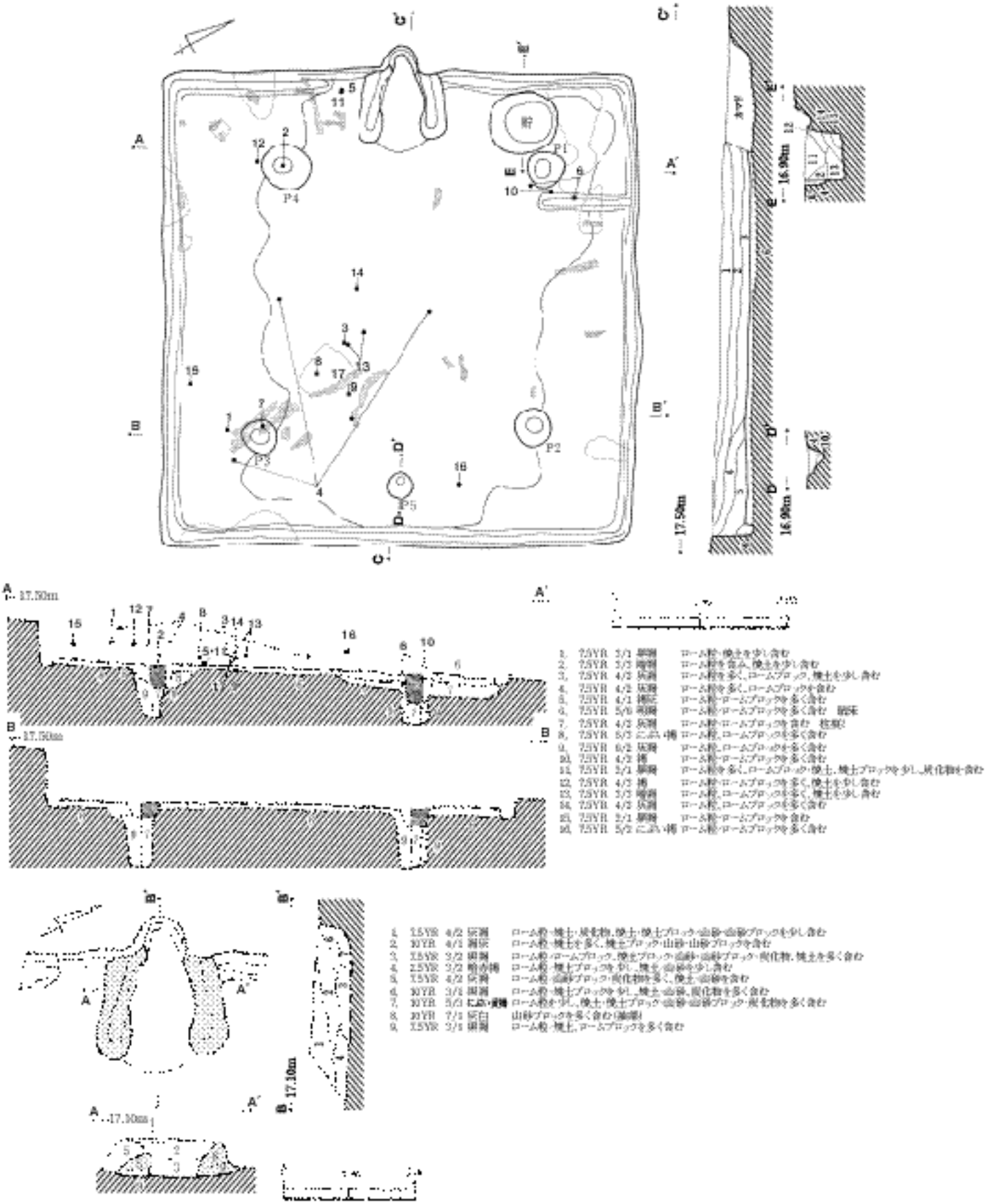
4号住居跡　5C-ｂ・ｄ区が中心に検出された。平面形は方形で、一辺2.8m・深さ0.3～0.35mを測る。主軸方向はN－21.5°-Wを示す。床面はハードロームまで掘り込んだまま平坦化している。壁溝はカマドのある北西角と西壁北2/3以外に廻る。カマドは北西角に敷設される。主柱穴はなく東壁側に階段用ピット（P5）が検出された。床面中央とカマド、P5付近の床面が著しく硬化していた。

遺物量は少ない。1と2は須恵器杯で、1は底部の切り離しを回転ヘラ切り、2は手持ちヘラ切りで行っている。1は体部の凸部と体部下端の稜部分が摩耗による円滑化が激しいが、2は調整後の二次的な劣化はみられない。2は体部下端を横位のケズリで整形している。また、両方ともφ3㎜前後の小石や細かい白色砂粒が全体に多くみられ、2は特に目立つ。3と4は破片から復元した甕で、両方とも削り込んで器壁を薄く仕上げている。4は所謂「武蔵型甕」と考えられる。

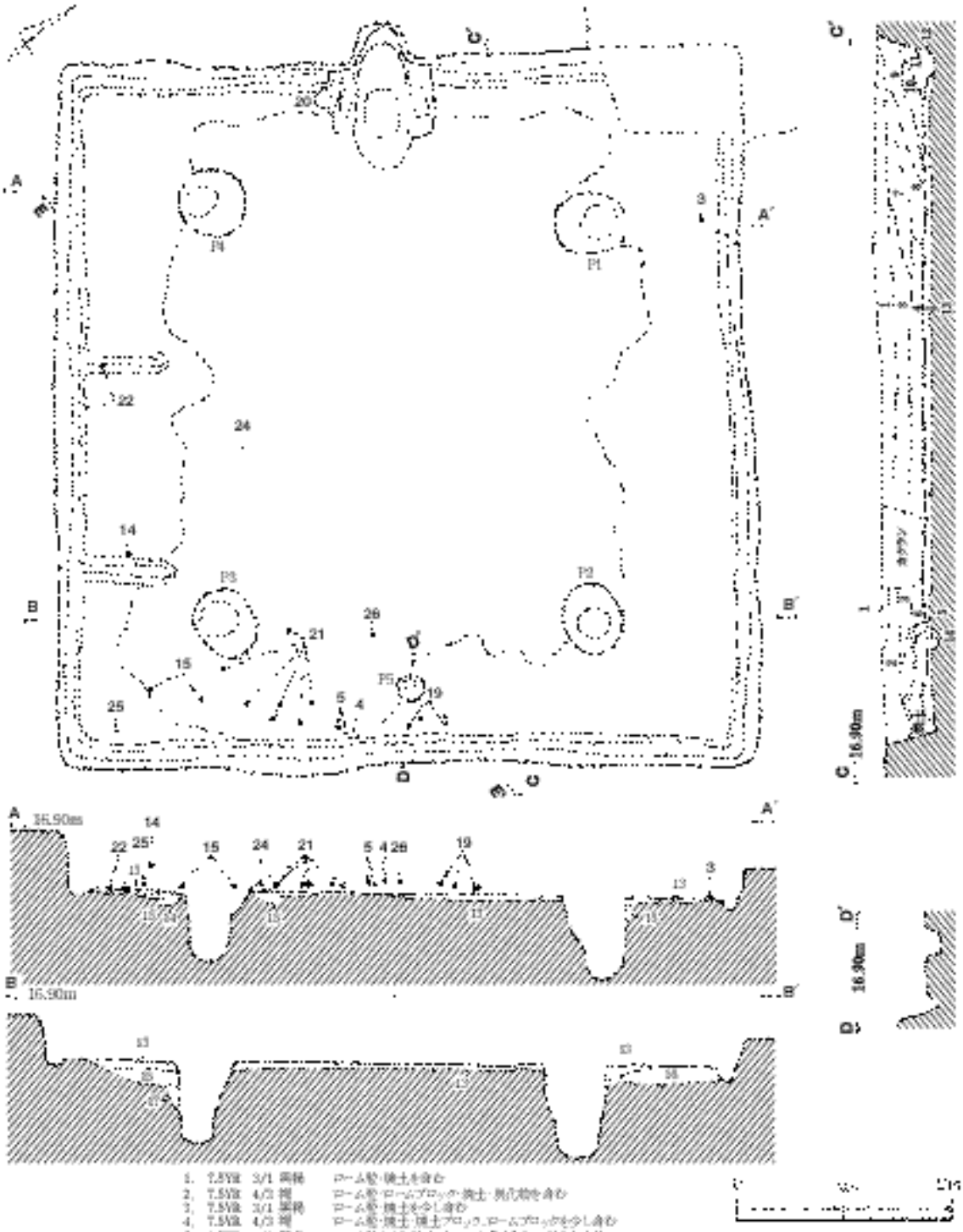
5号住居跡　3号住居跡を切る関係にあり、検出のみで埋土の掘削は行っていないが、一辺約3m前後の北西カマドの住居跡である。出土遺物は微量だが、奈良時代の所産と考えられる。

1号土壙　4D－ｂ区で検出された。平面形は長楕円形で長軸2.46m・短軸1.5m・深さ2.12m、底面は長方形で長辺1.26m・短辺0.2mを測る。出土遺物はないが、形状的に縄文時代の所産と推定される。

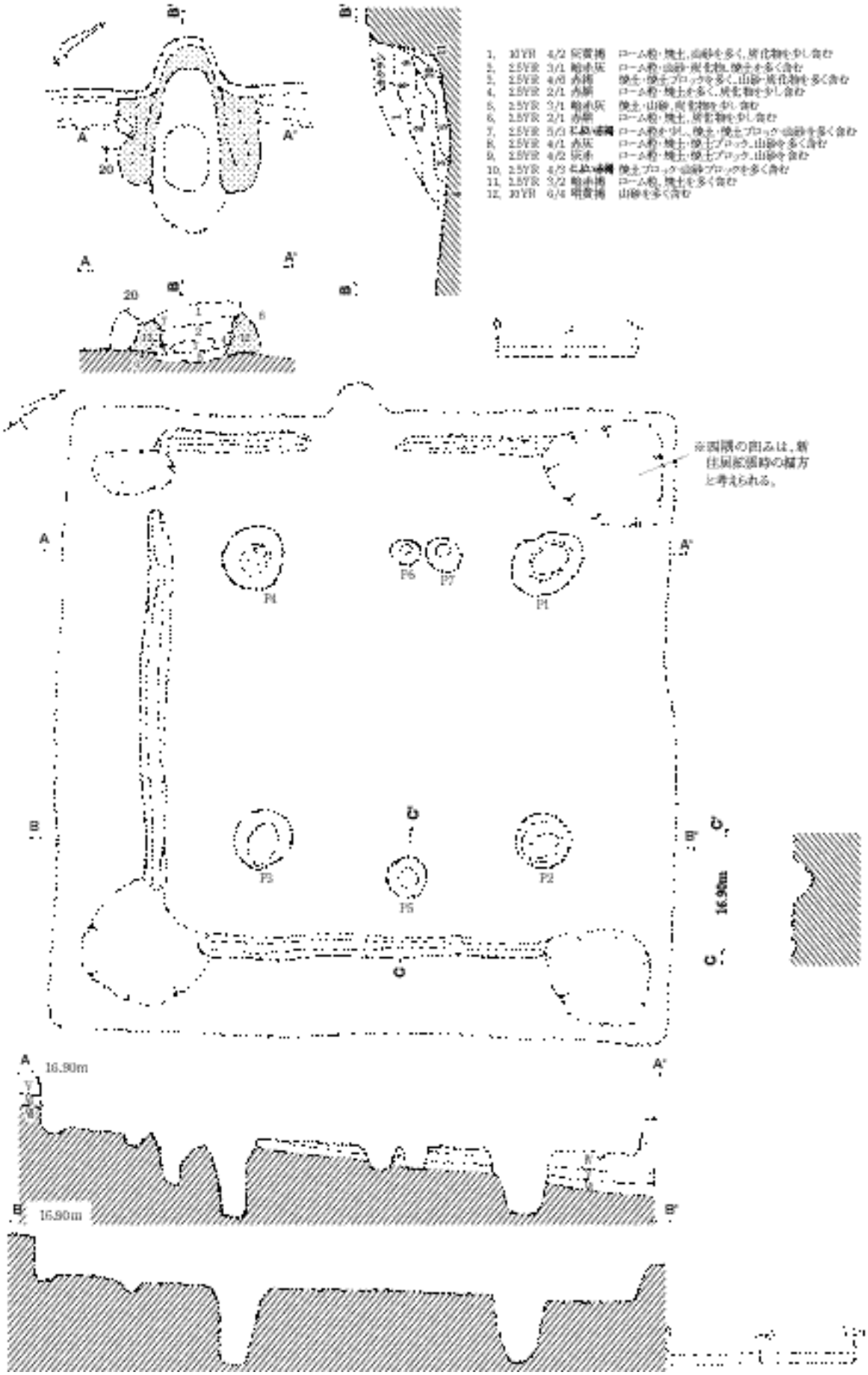
2号土壙　3G-ｃ・4G-ａ区で検出された。平面形は長楕円形で、長軸6.6m・短軸1.8m・深さ0.12mを測る。やや西寄りに0.5m程の円形の凹みがみられる。出土遺物がなく時期は不明である。



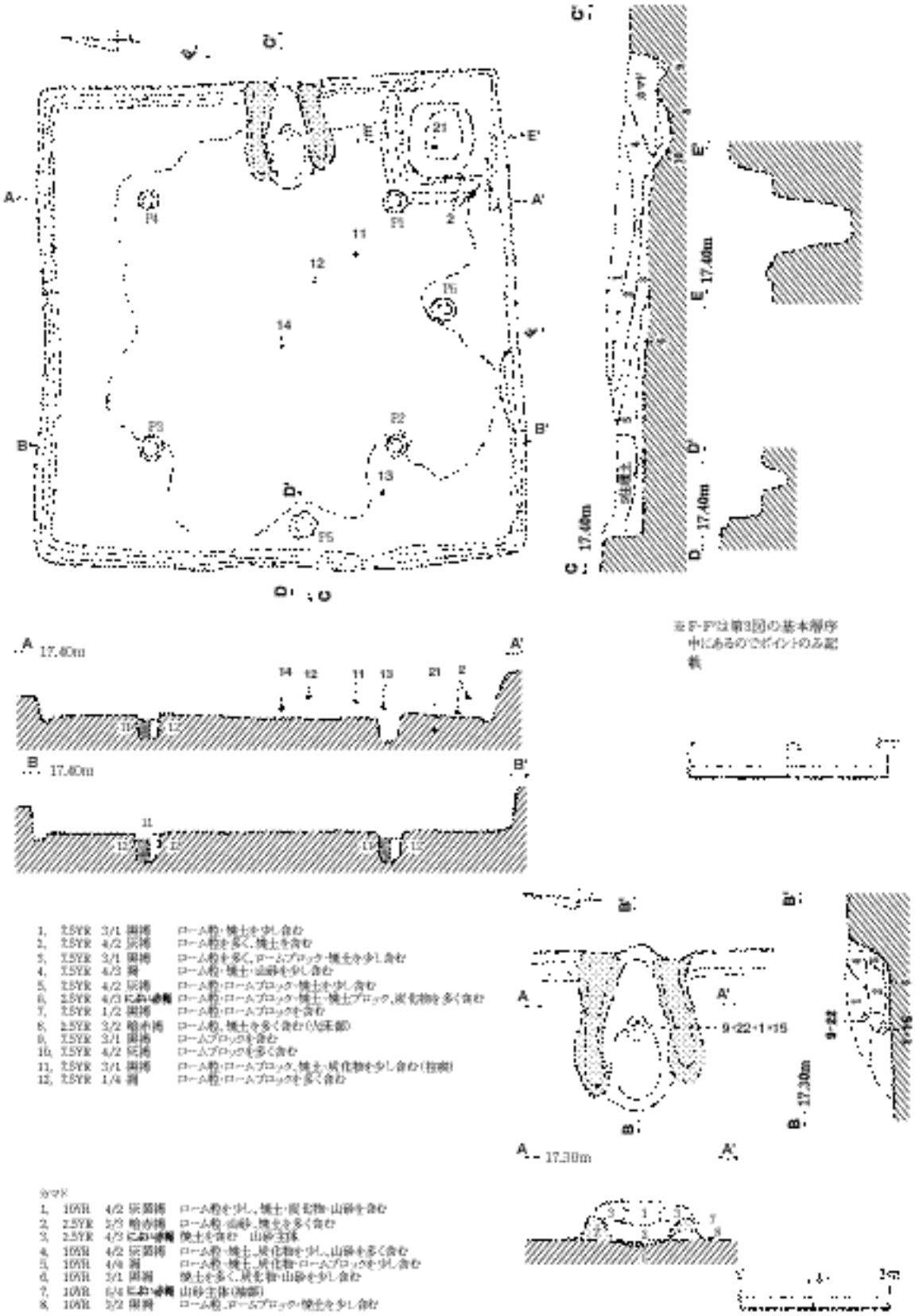
第5図　1号住居跡


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
P1
P2
P3
P4
P5
16.90m
1. 7.5YR 3/1 黒褐 ローム粒・焼土を含む
2. 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロック・焼土・炭化物を含む
3. 7.5YR 3/1 黒褐 ローム粒・焼土を少し含む
4. 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・焼土・焼土ブロック・ロームブロックを少し含む
5. 2.5YR 4/2 灰赤 ローム粒を少し・焼土ブロックを多く含む 焼き土・炭化
6. 2.5YR 3/2 暗赤褐 ローム粒・炭化物・ロームブロックを少し・焼土・焼土ブロックを多く含む
7. 2.5YR 3/1 黒褐 ローム粒・焼土を少し含む
8. 2.5YR 4/2 灰褐 ローム粒多く・焼土・炭化物・山砂ブロック・焼土ブロックを少し含む
9. 2.5YR 3/1 黒褐 ローム粒・焼土・炭化物・山砂ブロック・焼土ブロックを少し含む
10. 5YR 3/3 暗赤褐 ローム粒・焼土・炭化物・焼土ブロックを少し含む
11. 10YR 5/2 灰黄褐 ローム粒・焼土・山砂ブロックを含む
12. 10YR 4/3 [illegible] ローム粒・焼土・山砂を少し含む
13. 7.5YR 4/2 灰褐 ローム粒・ロームブロックを多く含む 貼床
14. 7.5YR 2/1 黒 ローム粒・ロームブロックを少し含む 貼床構築層
15. 7.5YR 4/3 褐 ローム粒・ロームブロックを多く含む
16. 7.5YR 2/1 黒 ローム粒・ロームブロックを少し含む
17. 7.5YR 4/3 褐 ローム粒を多くロームブロックを含む
※E・E'は第3図の基本層序中にあるのでポイントのみ記載

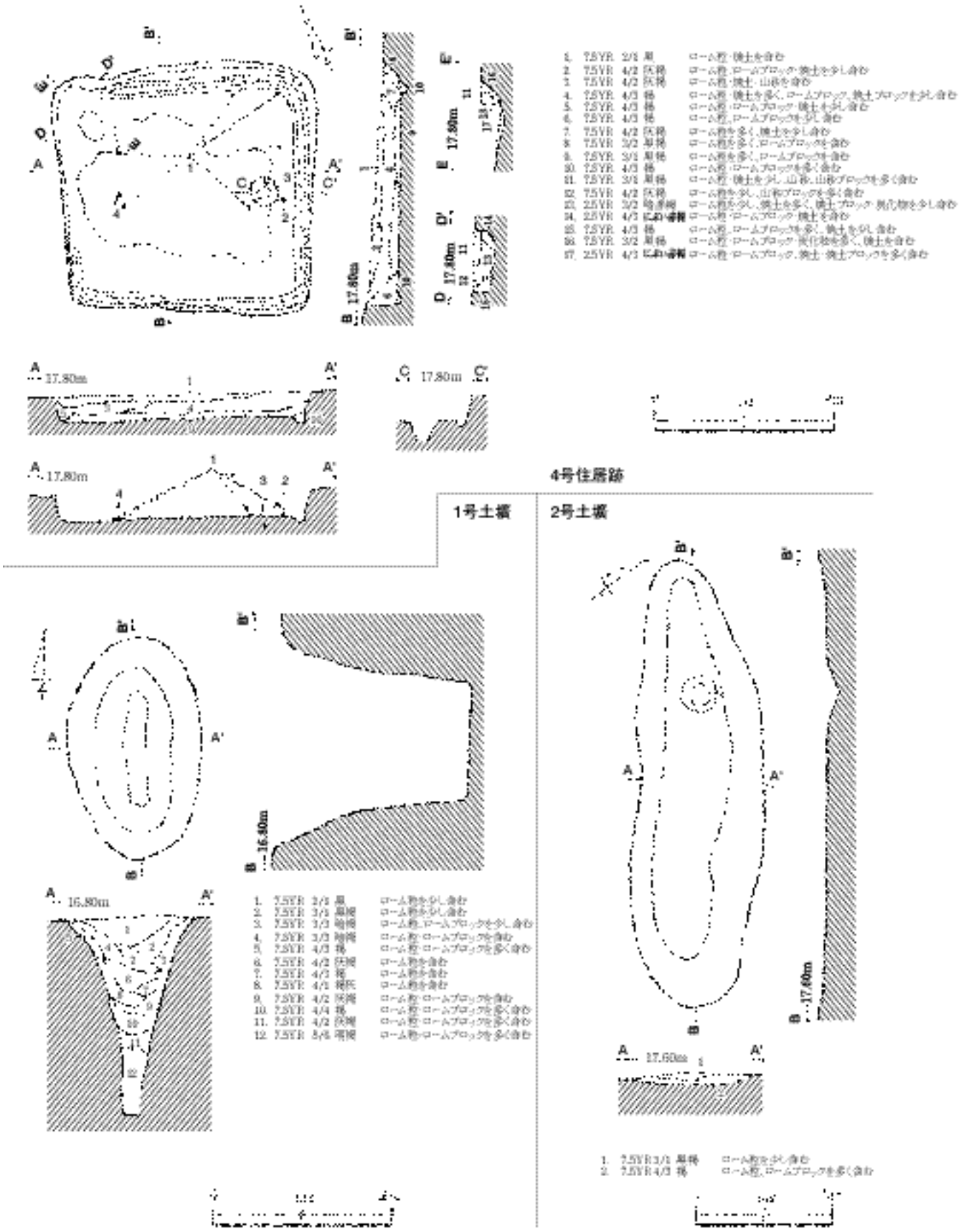
第6図　2号住居跡（新）



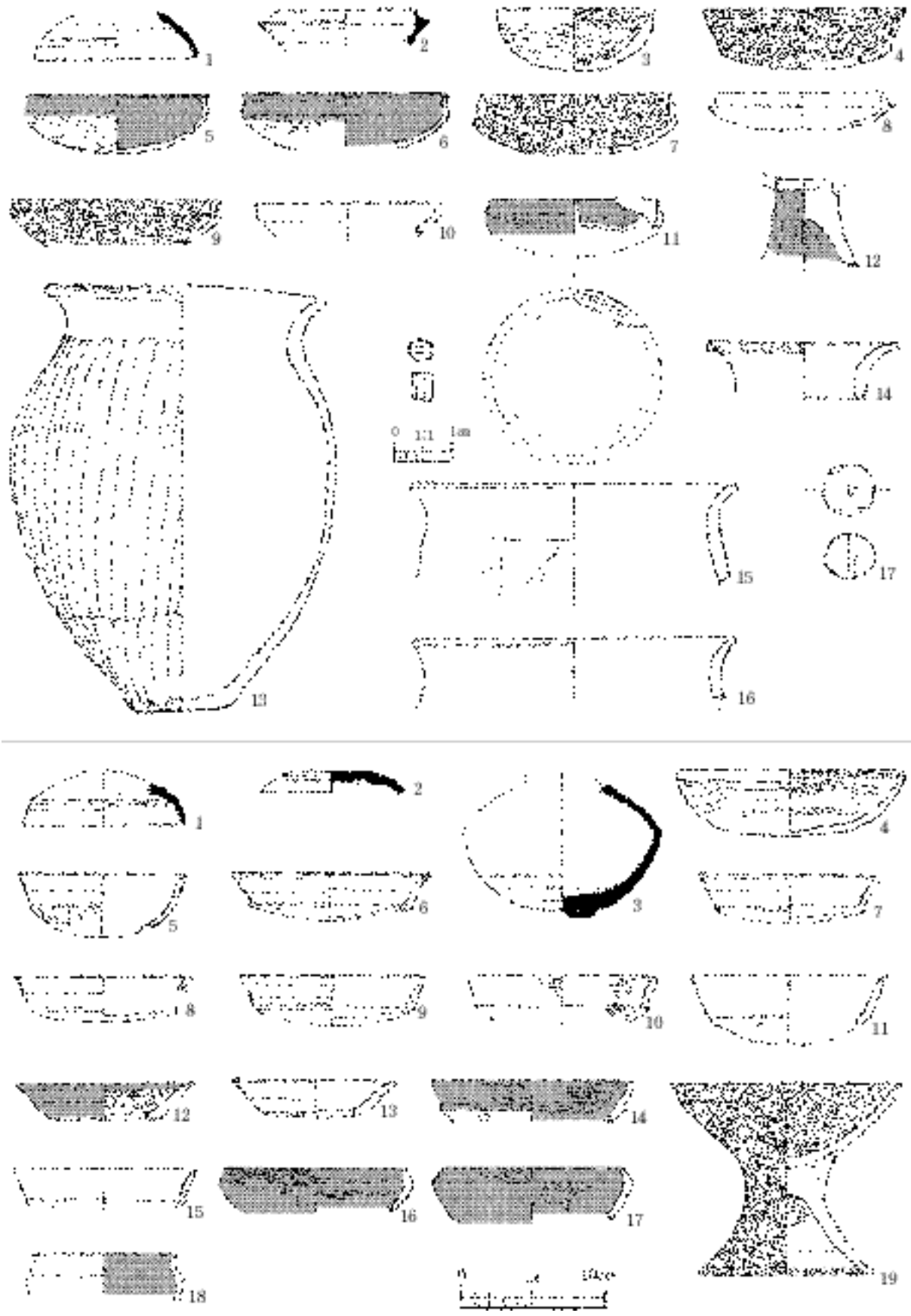
第7図　2号住居跡（旧）・カマド



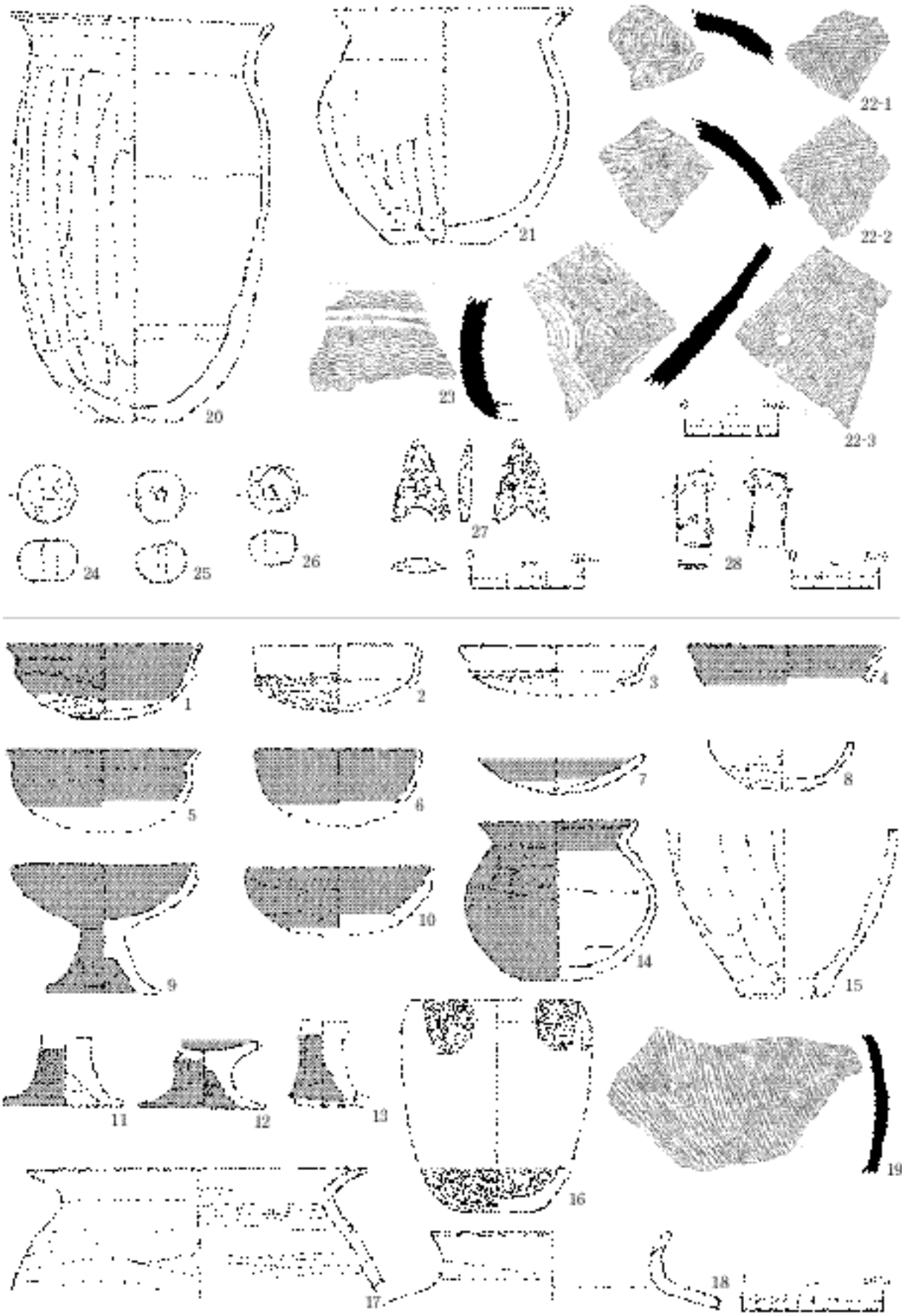
第8図　3号住居跡



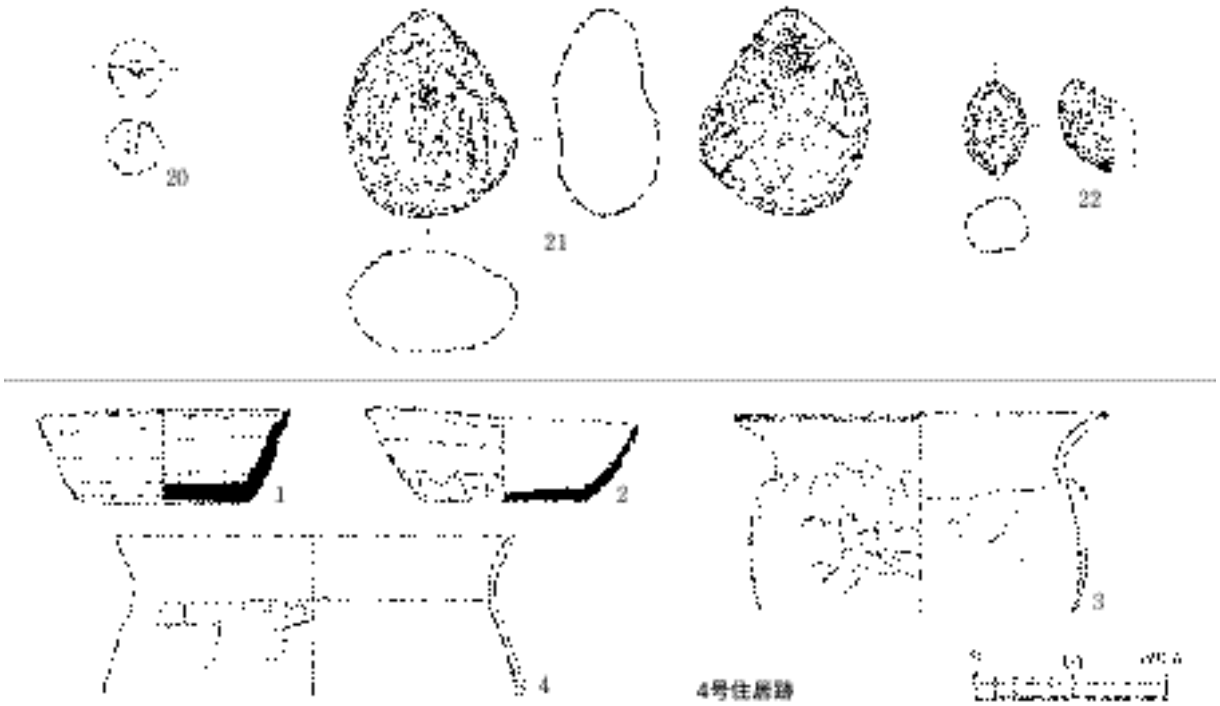
第9図　4号住居跡・1・2号土壙



第10図　1・2号住居跡出土遺物



第11図　2・3号住居跡出土遺物



第12図　3・4号住居跡出土遺物

第4表　1号住居跡遺物一覧

№	器種・種類	位置・層位	法量（cm・g）	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	須恵器 杯蓋	埋土中	口径（11.35） 残高（3.2）	成形：稜はみられるが口縁部と天井部間に形骸化 整形：回転 調整外面：ナデ→回転ヘラケズリ 調整内面：ナデ	色調：10G　5/1　緑灰色	破片	A101-54・3区	
2	須恵器 杯身	埋土中 下部	口径（10.0） 残高（2.8） 受部外径（11.9）	調整：外面、内面：ナデ	色調：10GY　6/1　緑灰色 胎土：φ0.6～1.5㎜の小石含む	破片	A101-42	
3	土師器 坏	埋土中 下部	口径　10.8 器高　4.3	調整外面：口縁部ナデ、ヘラケズリ 調整内面：口縁部横ナデからミガキ→斜位まばらミガキ 体部は斜位に回転するようまばらミガキ 底部は不定方向に1辺数本ミガキ	色調：7.5YR　4/4　褐色	完形	A101-76	碗形坏
4	土師器 坏	埋土中 散在	口径（14.2） 器高（3.4）	調整外面：口縁部横ナデ 調整内面：口縁部・底部ケズリ	色調：断面は10YR　7/4　にぶい黄橙色、 表面は2.5YR　3/1～3/2　黒褐色 黒色処理	1/2	A101-31・59・61・3区	有段口縁坏
5	土師器 坏	床面 直上	口径　12.6 最大径　12.8 器高　4.1	調整外面：横位ケズリ→不定方向に整形ケズリ→斜位の連続ケズリ 底部：横位のみケズリ→最大径は逆時計回りに斜位ケズリ	色調：5YR　6/6　橙色（表面地）、 10YR　4/8　赤色（赤彩） 胎土：φ0.5㎜から5㎜の小石を多く含む 内面及び口縁部外面に赤彩	口縁部のみ 1/4欠損	A101-77	比企型坏 ・外面に米粒が1つ混入 ・内部中央に指紋有 ・ハの土器とほぼ同位置で出土
6	土師器 坏	貼床 土中	口径（14.2） 最大径（14.4） 残器高（3.7）	調整内外面：口縁部横ナデ 底部　ヘラケズリ	色調：5YR　6/6　橙色（地）、 10YR　4/8　赤色（赤彩） 胎土：φ0.2㎜から3㎜の小石を含む 内面及び口縁部外面に赤彩	1/5	A101-3・5・1区	比企型坏
7	土師器 坏	埋土中	口径（13.0） 受部径（14.2） 器高　4.2	調整外面：口縁部で横ナデ、 底部　ヘラケズリ 調整内面：ナデ 口縁たちあげり中央がふくらむ	色調：5YR　3/2　暗赤褐色 黒色処理	1/4	A101-29・3区	
8	土師器 坏	埋土中 下部	口径（11.5） 受部径（13.5） 器高（2.5）	調整外面：口縁部ナデ 底部　ヘラケズリ 内面：ナデ ヘラケズリは劣化により不明瞭	色調：2.5YR　6/6　橙色	破片	A101-27	
9	土師器 坏	貼床 土中	口径（14.8） 残高（3.3）	調整外面：横位ケズリ→ナデ、 口縁は内外面横ナデ 内面：丁寧なナデ	色調：2.5YR　3/1　黒褐色 黒色処理	破片	A101-52	
10	土師器 坏	貼床 土中	口径（13.0） 残高（2.5）	調整外面：ケズリ 口縁部は内外共横ナデ 内面：ナデ	色調：10YR　5/6　黄褐色	破片	A101-4・3区	ハの土器と胎土の質感がよく似ている。
11	土師器 坏	床面 直上	口径（11.4） 最大径（12.4） 残高（2.5）	調整内外面：口縁部丁寧な横ナデ 外面：横位ケズリ	色調：10YR　5/6～6/6　黄褐～明黄褐色 胎土：白玉　径短3.75～4㎜長さ4.75㎜ 穴径1.5㎜	破片	A101-77	・白玉1個あり、脱落したもの1ケ所確認。 ・6の土器とほぼ同位置で出土。

№	器種・種類	位置・層位	法量（cm・g）	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
12	土師器 高坏	埋土中	残高（6.7）	調整：脚部内面内刳りのヘラ切り痕有り 外面は縦位のケズリ	色調：外面7.5YR　2/2　黒褐色 断面7.5YR　5/4にぶい褐色 内外面　黒色褐色	脚部のみ	A101-65	
13	土師器 甕	埋土中 下部	口径　19.6 頸径　16.4 胴部径　22.6 底径　7.0 器高　30.0	調整：外面：縦ケズリ 内面：ナデ	色調：10YR　4/4　褐色	完形	A101-76 63・1区 ・3区	内面に斑点状の劣化が多く、煮炊等に使用？
14	土師器 甕	埋土中 下部	口径（13.4） 残高（4.3）	調整内外面：ナデ	色調：7.5YR　6/4　にぶい橙色	口縁部 の一部	A101-50	径からすると広口の壺かもしれない。
15	土師器 甕	埋土中	口径（22.4） 残高（6.7）	調整内外面：横ナデ 口唇部に凹状のへこむ面有	色調：5YR　6/6　橙色	口縁部 の一部	A101-57	
16	土師器 甕	埋土中	口径（22.4） 残高（4.4）	調整内外面：横ナデ	色調：5YR　6/6　橙色 白色粒が目立つ	口縁部 の一部	A101-16	
17	土製品 土玉	床面 直上	径　3.6 高　3.2 重さ　32.8		色調：10YR　7/4　にぶい黄褐	一部欠損	A101-22	

第5表　2号住居跡遺物一覧

№	器種・種類	位置・層位	法量（cm・g）	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	須恵器 杯蓋	埋土中 上部	口径（11.6） 器高（3.1）	稜から口唇部の傾き、稜から天井部の形状から、天井部が平坦化していると推定。 内外ともケズリ部分は残有せず回転ナデ、稜は形骸化	色調：2.5YR　6/1　黄灰色 胎土：微量の白色粒が入る 焼成：良好、堅緻	口縁部 の一部	A102 1区上層	TK43～209前半
2	須恵器 杯蓋	埋土中 下部	残径（10.2） 残高（1.6）	外面に意図的に4条の沈線をめぐらせる。 天井部は回転ヘラ切り後に不整方向にナデ調整。内面中央部は調整が荒い	色調：2.5YR　6/2　灰黄色 焼成：良好、堅緻	天井部の 1/4	A102 3区下層	猿投窯東山44号窯資料中に類似品が出土。ただし杯身。
3	須恵器 長頸壺	床面 直上	最大径　14.0 底部　4.7 残存高　9.3	調整外面：回転横ナデ　下部ケズリ 調整内面：回転横ナデ 底部は丸身をおびるが、平坦化している	自然釉　内部にも部分的に釉が付着 色調：2.5GY　5/1　オリーブ灰色 胎土：φ1～2.5㎜の白色粒が多く入る。	体部のみで口縁欠損	04A102-53	底部に付着する断片は、置台とした杯が釉着して残ったものか？
4	土師器 坏	埋土中 下部	口径　15.9 残器高　4.8	調整外面：ケズリ、口縁部は横ナデ 調整内面：ミガキが横位に断続し、部分的に交わるミガキあり 全体的に摩耗が著しい	色調：内面赤彩？2.5YR　6/8　橙色 地は10YR　8/6　黄橙色 胎土：φ1㎜前後の赤色粒が全体に入る。 良好	1/2	04A102-43	
5	土師器 坏	埋土中 下部	口径　12.0 残高（4.0）	調整外面：体部は横位ケズリ→部分的斜位ケズリ 調整内面：不定方向ナデ 口縁部　横ナデ	色調：7.5YR　7/6　橙色 胎土：赤色粒が入る。	1/2	04A102-42・ 52	
6	土師器 坏	埋土中	口径（14.0） 稜径（11.4） 残高（2.6）	調整外面：横ナデ　底部ケズリ 調整内面：横ナデ　口唇部に凹線状の段有 口唇部に凹線状の段がある	色調：7.5YR　6/8　橙色	小片	04A102-4区 下層	
7	土師器 坏	埋土中	口径（12.8） 稜径（10.5） 残高（2.7）	調整外面：横ナデ　ケズリ 調整内面：横ナデ 口唇部内面に凹線状の段がある	色調：7.5YR　6/6　橙色 外面7.5YR　5/4　にぶい褐色	小片	04A102-4区	
8	土師器 坏	埋土中	口径（12.5） 稜径（10.5） 残高（2.1）	調整外面：横ナデ　ケズリ 調整内面：横ナデ 口唇部内面に凹線状の段がある	色調：7.5YR　7/6　橙色	小片	04A102-4区 上層	
9	土師器 坏	埋土中	口径（12.9） 稜径（11.2） 残高（2.2）	調整外面：横ナデ　ケズリ 調整内面：横ナデ 稜が鋭利　メリハリがある	色調：2.5YR　5/4　黄褐色	小片	04A102-4区 上層	
10	土師器 坏	埋土中	口径（13.2） 残高（3.4）	調整外面：横ナデ→ミガキ 底部ケズリ→ナデ 調整内面：横位ミガキ→不定方向ミガキ	色調：7.5YR　7/3　浅黄色	小片	04A102-4区 下層	
11	土師器 坏	埋土中	口径（13.8） 残高（3.7）	調整外面：底部ケズリ 調整内外口縁部：横ナデ	色調：2.5YR　8/4　淡黄色 胎土：鋼物・砂粒がめだつ	1/6	04A102-1区 上層	非在地系の土器 高坏坏部の可能性もあり
12	土師器 坏	埋土中	口径（12.4） 底形（8.2） 器高（2.45）	調整外面：横ナデ　体部　ケズリ 調整内面：内面ミガキ	色調：5YR　8/3　淡黄色（地） 2.5YR　3/1　黒褐色（黒彩？） 黒彩？横ナデ部分全て黒い 光沢はなし	小片	04A102-2区	口縁部と体部の色調差が明瞭
13	土師器 坏	埋土中	口径（11.5） 底径（7.7） 器高（2.5）	調整外面：横ナデ　底部ケズリ 調整内面：横ナデ	色調：7.5YR　8/3　浅黄橙色	小片	04A102-2区 上層	12と同系統の坏
14	土師器 坏	埋土中 上部	口径（14.0） 残高（3.1）	調整内面：黒色処理後ミガキ、光沢あり 調整外面：体部はケズリ 口縁と体部境、稜の上部のへこみが明瞭	色調：7.5YR　6/4　にぶい橙色（地） 7.5YR　2/1　黒色（黒色処理） 内面・外面口縁部黒色処理	小片	04A102-5	

№	器種・種類	位置・層位	法量（cm・g）	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
15	土師器 坏	埋土中 下部	口径（13.0） 口縁高　2.3 残高（3.0）	調整外面：横ナデ　底部ケズリ 内面：横ナデ キメ細かく器面がすべすべしている	色調：5Y　8/4　淡黄色 胎土：φ0.2～0.5cmの赤色粒がみられる（パミス？） 焼成：やや軟質	小片	04A102- 34・35	
16	土師器 坏	埋土中	口径（12.6） 最大径（13.6） 口縁高　1.5 残高（3.1）	調整外面：横位キガキ→斜位ミガキ 内面：口縁部ミガキ　底部は不定方向ミガキ	色調：5YR　6/6　橙色（地） 7.5YR　2/2　黒褐色（黒色処理） 内外面　黒色処理	口縁 1/4	04A102- 3区下層	
17	土師器 坏	埋土中	口径（13.0） 最大径（15.2） 口縁高　1.1 残高（3.6）	調整外面：口縁部横ナデ→ミガキ 底部ケズリ→ナデ 内面：口縁部横ナデ	色調：10YR　6/4　にぶい黄橙色（地） 7.5YR　3/2　黒褐色（黒色処理） 内外面　黒色処理	小片	04A102- 3区下層	
18	土師器 坏	埋土中	口径（10.2） 最大径（11.0） 残高（3.0）	調整内外面：横ナデ 内面のみ黒色化するが、小片なので全体が黒色化していたかは不明	色調：7.5YR　3/3　暗褐色（地） 7.5YR　2/1　黒色（内面） 内外面　黒色処理？	小片	04A102- 4区上層	
19	土師器 高坏	埋土中 下部	口径　16.0 脚据径　13.4 器高　12.4 坏高　5.4	調整外面：口縁部横ナデ 脚部ケズリ→ナデ 内面：横ナデ　脚部　ケズリ→不定方向ナデ・横ナデ 成形：坏部・脚部別につくり　接合　接合部に外から補強	色調　地が7.5YR　8/6　浅黄橙 赤彩からYR　5/4　にぶい赤褐 脚基部内部　5YR　4/2　灰褐 内外面　赤彩だがほとんど色はぬけている	2/3	04A102- 45・46・47・48・2区 4区上層・下層	
20	土師器 甕	床面 直上 カマド脇	口径　18.8 底径　6.3 器高　29.6	調整外面：口縁部横ナデ　脚部は下からの縦位ケズリ 底部は上から下への斜位ケズリ 内面：接合痕　ナデつげ痕がある	色調：7.5YR　4/4　褐色 内面上部は、変色し、黒ずんでいる	完形	04A102-54	
21	土師器 甕	床面 直上	口径　17.9 底径　7.1 残高（16.4）	調整外面：縦位ケズリ　下部が横位又は斜位ケズリ　口縁部　横ナデ 底部　輪積み痕	外面肩部以下　スス付着 底はスス付着なし→直火はうけていない 色調：7.5YR　4/3　褐色	ほぼ完形 （口縁部のみ欠損）	04A102-36～ 41・49	
22	須恵器 甕	壁溝 埋土中		外面：タタキ→部分的ケズリ→ナデ 内面：同心円多キ→ナデ	色調：5G　4/1　暗緑灰色	小片	04A102- 22・26	拓本
23	須恵器 甕	埋土中		稜の上・下部にクシガキ・波状文	色調：7.5GY　4/1　暗緑灰色	小片 （口頸部）	04A102- 4区上層	拓本
24	土製品 土玉	貼面 直上	径　4.3 高　2.9 穴径　0.9 重さ　53.5	穿孔部周辺には、平坦部あり	色調：7.5YR　3/4　暗褐色 表面がやや劣化している	完形	04A102-9	
25	土製品 土玉	貼面 直上	径　3.6 高　2.9 穴径　0.7 重さ　38.9		色調：7.5YR　4/4　褐色	完形	04A102-17	
26	土製品 土玉	埋土中 下部	径（3.6） 高　2.5 穴径　0.8 重さ　20.0		色調：7.5YR　4/3　褐色	1/2	04A102- 4区下層	
27	石鏃	埋土中	長（2.1） 短　1.1 重さ　0.9	黒曜石		先端 欠損	04A102- 2区一括	縄文時代の遺物が混入？
28	鉄製品	埋土中	長（2.7） 短　1.1 重さ　1.8	図面上部に1mmの穴あり、厚みが0.8～1mm程で刃部がなく幅のない板状を呈する　上下端は欠損		一部	04A102- 一括	

第6表　3号住居跡遺物一覧

№	器種・種類	位置・層位	法量（cm・g）	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	土師器 坏	カマド内	口径　13.7 器高　5.4	調整外面：横ナデ　ケズリ 内面：ナデ	色調：7.5YR　5/6　明褐色　外面　スス付着　赤彩2.5YR　4/8赤褐 内面は赤彩2度ぬりか？外面に比べ赤い 底部付近は内外面共に赤彩していない	2/3	04A103- 9・カマド	
2	土師器 坏	埋土中 上部 下部	口径　12.0 器高　4.8	調整外面：口縁横ナデ　体部　ヘラケズリ 内面：回転ナデ 口縁端部は内傾する平坦面を有する	色調：7.5YR　5/6　明褐色 胎土：φ0.5～2mmの小石　1mmの白色粒・少し含む	完形	04A103- 1・2	
3	土師器 坏	埋土中	口径　14.0 残高（3.0）	調整外面：口縁横ナデ　底部　ヘラケズリ 内面：回転ナデ	色調：5YR　5/6　明赤褐色 胎土：白色・黒色粒含む	小片	04A103 一括	
4	土師器 坏	埋土中	口径（14.0） 残高（2.9）	調整内外面：ナデ	色調：7.5YR　4/6　褐色 胎土：白色粒含む 内外面赤彩	小片	04A103 一括	
5	土師器 坏	埋土中	口径（13.4） 残高（4.0）	調整外面：口縁横ナデ　底部　ヘラケズリ 内面：ナデ	色調：断面10YR　5/6　黄褐色 赤彩　10YR　4/8　赤 内外面赤彩	小片	04A103 一括	
6	土師器 坏	埋土中	口径（11.2） 残高（4.1）	調整内外面：ナデ→赤彩→ケズリ	色調：断面7.5YR　5/6　明褐色 赤彩　10YR　4/6　赤 内外面赤彩	小片	04A103 一括	

№	器種・種類	位置・層位	法量（cm・g）	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
7	土師器 坏	埋土中	残高（3.0）	調整外面：ヘラケズリ	色調内外面：赤彩10R　6/6　赤	底部のみ	04A103 一括	
8	土師器 坏	埋土中	底径　4.5 残高（3.5）	調整外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	色調：5YR　4/6　赤褐	底部のみ	04A103- 3区	
9	土師器 高坏	カマド内	坏口径　13.0 基部径　3.0 脚端径　7.9 器高　9.3 脚部高　4.7	調整外面：横ナデ 脚部　ヘラケズリ　横ナデ 内面：坏部ナデ、脚部　ヘラ右回転内剝り	色調：内外面赤彩　10YR　4/6赤 胎土：白色・黒色粒を含む	完形	04A103- 8・カマド	カマド支脚として再利用されて坏外面は2次被熱で劣化している
10	土師器 高坏	埋土中	口径（13.3） 残高（4.1）	調整外面：ヘラケズリ 内面：横ナデ	色調：内外面赤彩　10YR　6/6　赤	坏部の 一部	04A103 一括	
11	土師器 高坏	埋土中 中位	脚端径　8.6 基部径　3.5 残高（5.0）	調整外面：ナデ→ヘラケズリ 内面：脚部　右回転内剝り　横ナデ	色調：内外面赤彩　10YR　6/6　赤 胎土：白色・黒色粒を含む 赤彩	脚部 のみ	04A103 3	
12	土師器 高坏	埋土中 中位	脚端径　9.0 基部径　4.5 残高（4.9）	調整外面：ナデ→ヘラケズリ 内面：坏部ナデ　脚部ヘラ右回転内剝り	色調：内外面赤彩　10YR　4/6　赤 胎土：白色粒を含む 赤彩	脚部 のみ	04A103 4	
13	土師器 高坏	埋土中 中位	基部径　3.4 残高（6.1）	調整外面：ナデ→ヘラケズリ 内面：坏部ナデ　脚部ヘラ右回転内剝り	色調：内外面赤彩　2.5YR　5/6 明赤褐 胎土：白色粒を含む 赤彩	脚部 のみ	04A103 5	
14	土師器 小型甕	埋土中 中位	口径　10.8 最大径　13.5 底径　4.1 器高　11.2	調整外面：ヘラケズリ→ナデ　口縁　ナデ 内面：一部ケズリ→不定方向ナデ 成形：口縁部・胴部・底部と分割し接合している。輪積痕あり	色調：外面と内面口縁部赤彩？ 外面と口縁内面赤彩	完形 口縁部 一部穴	04A103 6	
15	土師器 甕	カマド内	底径　6.2 残高（12.1）	調整外面：ヘラケズリ→ナデ 内面：ナデ 成形：輪積痕	色調：7.5YR　6/6　橙 内面2次焼成により劣化が激しい	底部 1/3	04A103 9・カマド	カマド内壁の補強材に転用か？
16	土師器 無頸壺？	埋土中 貯蔵穴内	底径（5.5）	調整外面：ナデ光沢有　ケズリ 内面：ナデ　接合痕有り 内外面くろびかる	色調：断面　7.5YR　4/4　褐 表面7.5YR　2/3極暗褐 いぶされている→吸炭？	底部 1/2	04A103- 3区・貯	
17	土師器 甕	埋土中	口径（24.0） 残高（8.8）	調整内外面：口縁横ナデ、ヘラケズリ 成形：輪積痕　内傾	色調：7.5YR　5/6　明褐	小片	04A103 一括	
18	土師器 甕	埋土中	口径（17.0） 残高（5.6）	調整外面：ヘラケズリ→ナデ 内面：ナデ	色調：10YR　5/4　にぶい黄褐	小片	04A103 一括	
19	須恵器 甕	埋土中		調整外面：タタキ 内面：ナデ	色調：2.5GY　5/1　オリーブ灰	小片	04A103 一括	拓本
20	土製品 土玉	埋土中	径　2.9 穴径　0.5 高　2.8		色調：10YR　7/4　にぶい黄橙	1/2	04A103 一括	
21	軽石	貯蔵穴内	長　10.6 短　8.8 重さ　91.4	溝状の削痕が表裏につく		完形	04A103 7	使用痕（紐を縛った痕あり）
22	軽石	カマド内	長（4.9） 短　3.2 重さ　10.6	カマド内から出土したが、2次被熱はうけていない。		一部 欠損	04A103 8	

第7表　4号住居跡遺物一覧

№	器種・種類	位置・層位	法量（cm・g）	手法・形態の特徴	胎土・色調・焼成などの特徴	残存具合	注記	備考
1	須恵器 坏	貼面 直上 下部	口径　13.3 底部　8.0 器高　5.0	調整外面：回転ナデ　回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ 稜線は全て摩耗により鋭利さを欠く	色調：2.5GY　5/1　オリーブ灰色 胎土：多くの白色砂粒が入る	4/5	04A104 1～3・6・12 12・20・1区	摩耗の度合から日常雑器として使用していたと推定
2	須恵器 坏	貼面 直上	口径　14.4 底部　8.0 器高　4.0～5.0	調整外面：回転ナデ　横位ケズリ 内面：回転ナデ ケズリは荒い　底部は手持ちヘラケズリ	色調：2.5GY　4/1　暗オリーブ灰色 胎土：φ0.2～20㎜の白色粒・砂粒多く含む	1/2	04A104・4 04A103一括	3号と4号住の小片が接合
3	土師器 甕	PH5 埋土内	口径（20.6） 器高（10.3）	調整外面：横ナデ　縦ケズリ　横ケズリ 内面：横ナデ　胴部　不定方向ナデ	色調：5YR　5/6　明赤褐色	1/6	04A104・19	
4	土師器 甕	埋土中 上部	口径（21.2） 頸部径（19.0） 残高（8.4）	調整外面：横ナデ　横位方向ケズリ 内面：横ナデ 口縁端部はつまみあげられる	色調：5YR　5/6　明赤褐色 胎土：φ0.5～1㎜の砂粒 長石・角閃石が入り部分的に光る　φ0.1～0.3㎜　白色砂粒		04A104・13	

Ⅵ　まとめ

今回の調査では、縄文時代の土壙1基、古墳時代後期の竪穴住居跡3軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒、時期不明の土壙1基が検出された。

縄文時代の遺構は、今回調査で確認された土壙（陥穴？）が本遺跡で初めてのものである。遺物は今回調査では出土しなかったが、平成13年度のＥ区で縄文時代晩期、平成14年度のＧ区で中期の土器片が微量出土している。本遺跡での縄文時代の遺構や遺物の在り方を示唆しているようである。

検出された竪穴住居跡の内、平面プランを確認しただけの5号住居跡以外は、出土遺物の検討から遺構廃棄時期に時期差を確認することができた。

古墳時代後期の住居跡である3号住居跡は、完形品の須恵器杯蓋模倣坏（2）の模倣具合が比較的須恵器の形状に忠実で、調整を丁寧に仕上げていることや出土遺物中における赤彩土器の比率が高いことなどから上限を6世紀代でも半ば頃と捉え、最も古い住居跡と考えている。

1号住居跡は、5・6の比企型坏の形状と埋土中の破片だが黒色処理をした須恵器模倣坏（4・7・9）が混在することから、6世紀末葉～7世紀初頭頃に廃棄された住居跡と考えている。この住居跡から出土した4の坏は所謂「有段口縁坏」で、平成3年度調査のＢ区でも有段口縁坏を伴う住居跡が多く検出されており、両調査区の位置関係から1号住居跡が6世紀末葉頃～7世紀初頭頃に展開していた集落の北西端に位置していた住居であったと推定される。また、11の坏は小片だが、胎土中に石製白玉一点と玉が脱落した痕跡が他に一箇所あることから､複数の玉を含有していた土器であることがわかった。しかし、同一個体片を他に見いだすことはできなかったことから、玉の配置関係を示した図面はあくまでも編集者の想定であることを明記しておきたい。白玉は、被熱により劣化が激しく、見た目で石の種類の明確な同定はできないが、滑石製である可能性が高い。因みに、被熱による劣化はこの玉が、焼成時に器面に露呈していたためと考えている。俯瞰図面にあるように、口縁端部から玉までの距離がほぼ等距離で、あたかも意図的に配置したようにも感じられる。図面上の推定径から、互いの距離約2㎝を基準とすると15個程度を配することが可能なようである。もし、意図的に配したのならば見た目を重視した結果であり、用途も日常雑器ではないように思われる。しかし、出土遺物中にこのような非日常的な印象を受ける遺物が他に皆無なことから、偶然の混入とも考えられる。このような土器は、他の類例との比較・検討を踏まえるべきと考え、今後の課題として留意しておきたい。

2号住居跡は、11の高坏を除き赤彩された土器が全く出土しておらず、無彩又は黒色処理の土器片が多くを占める。須恵器は、形状・胎土的に東海産である可能性が強く、2の天井部外面の重圏状の沈線を有するものが、猿投窯の東山44号窯出土資料の中に類似例がみられ、1の杯蓋と3の長頸壺胴部も6世紀末葉～7世紀初頭頃の範疇に収まると考えられる。土師器坏に赤彩土器が全く含まれず、無彩と黒色処理のもので占められることを踏まえ、7世紀前半までに廃棄された住居と考えられる。

12の坏は外面の口縁部を黒色処理し、体部にはまったく着色した痕跡がみられない。地の色がやや灰白色に近いことから白黒に塗り分けられているのが明瞭な土器である。多くを検索していないものの、千葉市域でこのような彩色を施される土器はほとんど確認されていないと思われる。6・7・8の口縁端部内面に段を有する無彩の坏は、神奈川県東部を含む東京湾岸地域に普遍的にみられる土器と

考えられているが、今回の調査でこのような形態の坏が包含されていたのはこの住居跡だけであった。集落内において、時期的に隔たりのない住居が共存する中で、全く他の遺構に伴出しない形態の土器が含まれることはこの住居を廃棄した住人と周辺に共存していた集落の構成員との間に何かしらの差違が存在していたのではないかと想像する。これらのような特徴のある、他との差違を見出すことができる遺物を包含する意味で、この住居跡は注目に値すると考えている。なお、27の黒曜石製の石鏃は埋土中に混在したもので、形態的に縄文時代の所産と考えられる。また、28の金属製品は、薄い鉄板状の製品で、穿孔されている。上下共に欠損しているので全体像が理解できないが、小札のようなものか、飾り金具の一種かもしれない。

4号住居跡の須恵器杯（1・2）は、底部の調整が回転ヘラケズリ(1)と手持ち不定方向削り(2)、体部下端の調整が回転ヘラケズリ？と手持ちヘラケズリ(2)であり、形態的に8世紀後半以降のものと判断できる。胎土に多くの砂粒（白色のものが多い）を含み、在地産ではない様相を呈している。供伴関係にあるが、1は口縁端部、体部の凸部、体部下端が激しく摩耗しており、恒常的な使用による摩耗の感が伺えるが、2にそのような雰囲気が全く見受けられないということから、器形が同一でも用途が異なる場合があることを示唆しているのであろうか。

以上のことから、住居跡の廃棄順は、3号→1号→2号→4号となり、4号だけが完全な間断期があり、他のものは併存時期の可能性も含め、継続してつくられていたように見受けられる。なお、2号住居跡の旧住居跡は、場合によっては1号住居跡と併存していた可能性もあろう。

次に、砂層と遺構との関係を過去の調査成果を踏まえて整理しておく。平成13年度調査のＥ区で検出された砂層が今回の調査（H区）でも確認された。Ｅ区での砂層下面の標高が17m前後、H区のＩ層上面（砂層下面）が16.8m前後であり、Ｆ区の砂層、Ｄ・Ｇ区で砂を多く含む表土層（耕作土）の存在からも、砂層が広く分布している傾向が伺える。Ｅ区の成果報告書で指摘されているとおり、この砂層は遺構上層の黒褐色土や暗褐色土の上層に堆積し、過去の成果を含めた住居跡のいずれの埋土にも含まれない事実から、住居跡の下限である平安時代以降に堆積したものであることがあらためて確認されたことになる。砂層は、東京湾岸に形成された砂州から運ばれた風成砂層であることは理解できるが、その成因を解明するには至っていない。

有段口縁坏は、1号住居跡から出土している。図示できたのは4の坏のみだが、細片を含めると実数はもう少し増加する。Ｅ区の1号住居跡-2の坏やＢ区、Ｇ区の文化課調査分（未報告）の成果中にも多く含まれていることがわかっている。時期は概ね6世紀末葉～7世紀後半の範疇に収まるものばかりである。これらの土器が搬入品であるか在地産であるかの検討は不十分だが、この時期に埼玉県北部から群馬県平野部を中心とする地域との何かしらの交流痕跡の一つであることは間違いなく、この地域を代表する規模を誇る上ノ台遺跡でも同様の傾向が伺えることから、花見川河口部を望む周辺台地上に展開する遺跡群に共通の交流基盤が存在していたことが予想される。有段口縁坏以外にも、Ｓ字状口縁の坏、所謂「比企型」坏も一定量含まれていることも含め、今後、上ノ台遺跡を中心に周辺遺跡との多角的な検討が重要な課題である。

写 真 図 版

遺跡付近航空写真1（北東から）※平成3年撮影

遺跡付近航空写真2（南西から）※同上

図版2

調査風景1（西から）

調査風景2（東から）

1号住居跡

1号住居跡　カマド

1号住居跡　カマド及び貯蔵穴

1号住居跡　遺物等出土状況

2号住居跡

2号住居跡　カマド

2号住居跡　旧住居跡

2号住居跡　掘方下自然堆積層状況

3号住居跡

3号住居跡　カマド

3号住居跡　カマド及び貯蔵穴

3号住居跡　貯蔵穴付近遺物出土状況

4号住居跡

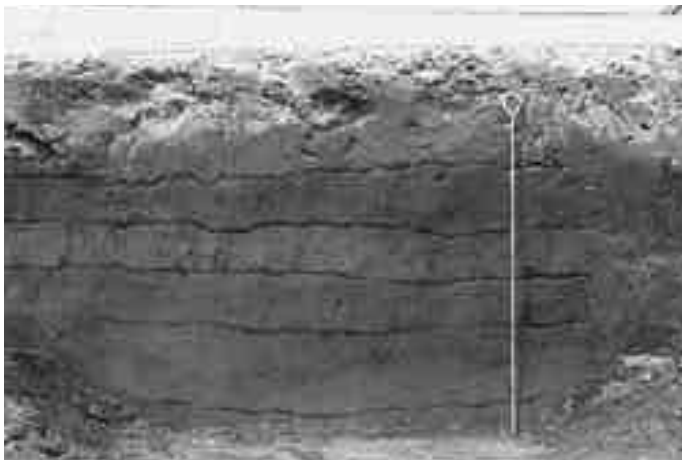
4号住居跡　遺物出土状況

図版4

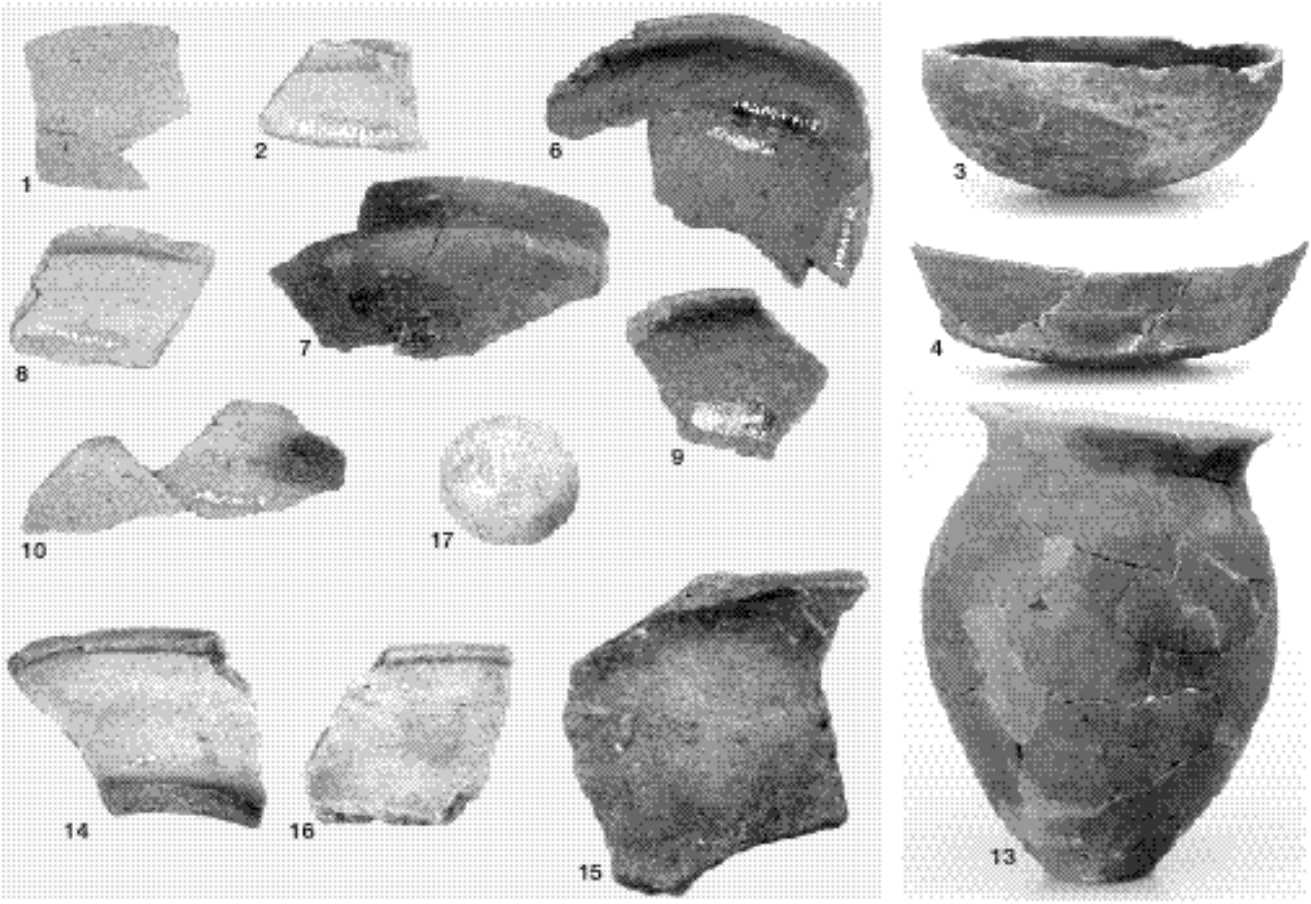
1号土壙

2号土壙

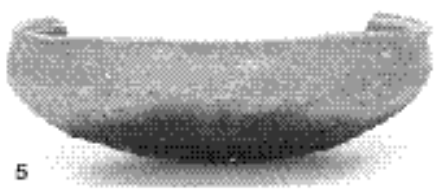
2号土壙遺物出土状況



基本層序

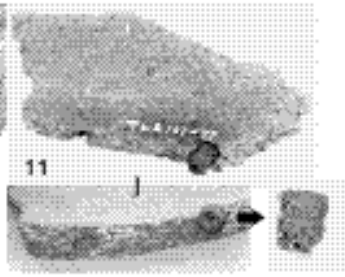


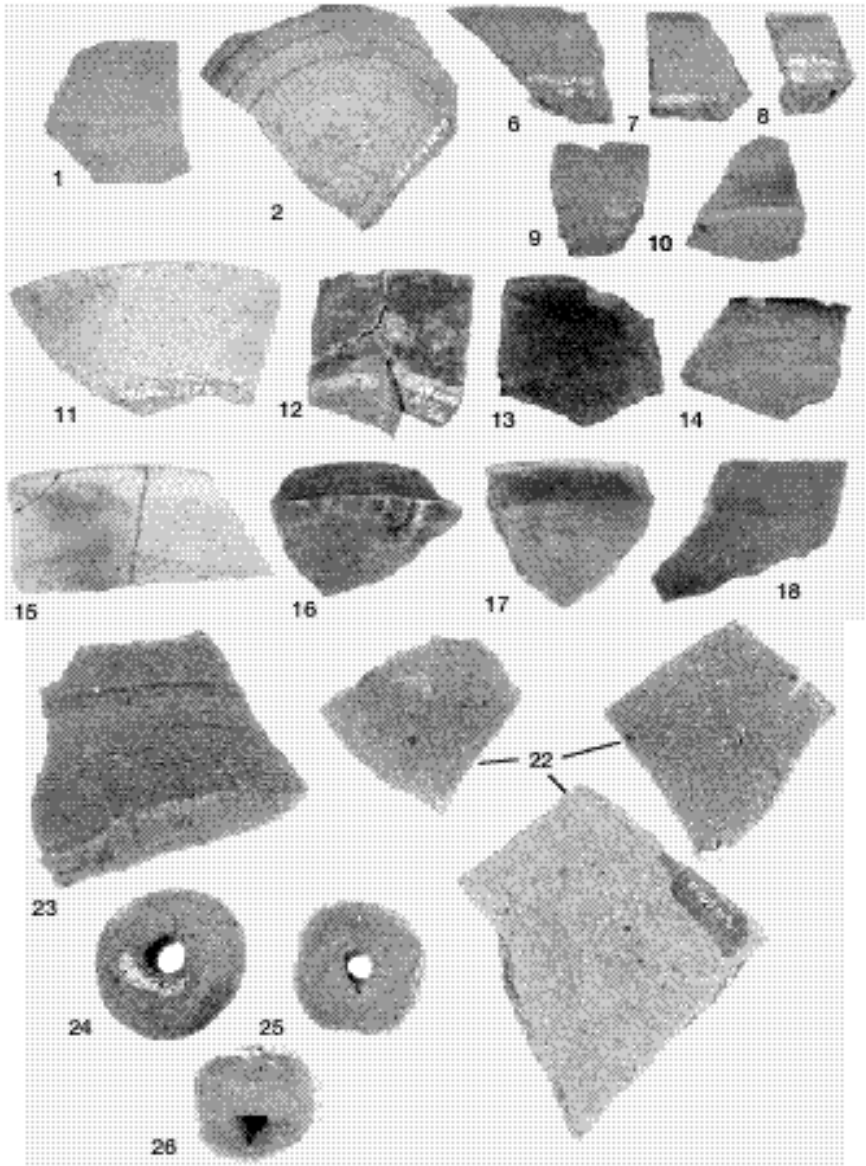
1号住居跡出土遺物（1）

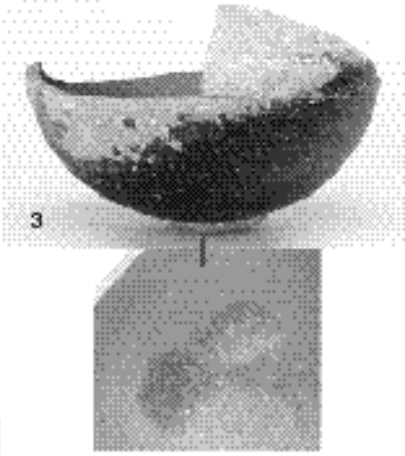


1号住居跡出土遺物（2）

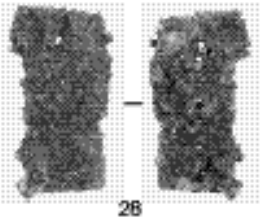
5の外面で観察された
胎土に混入した米粒

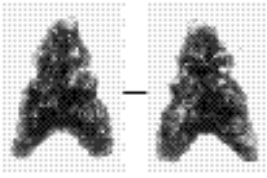






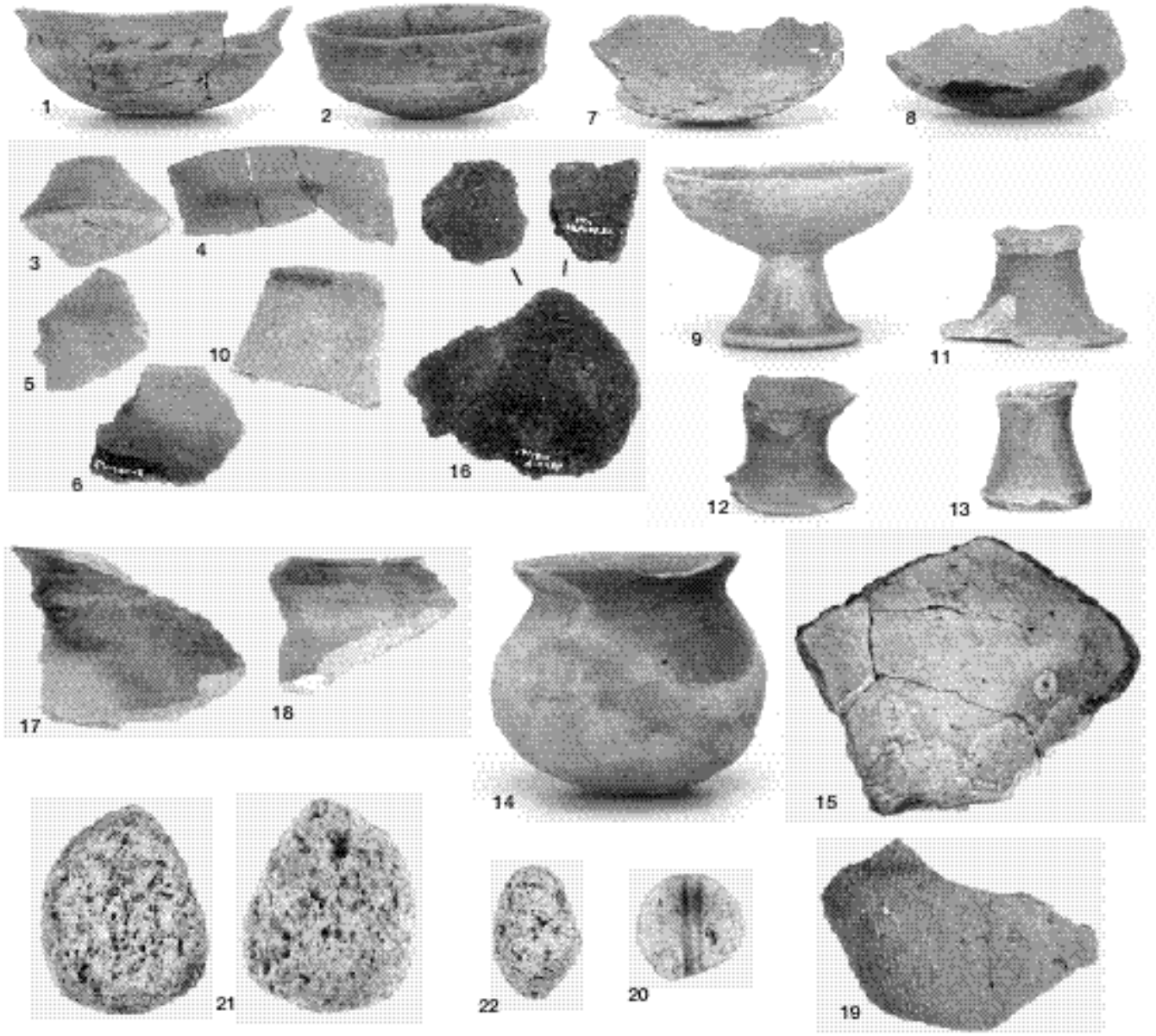
内面に付着している
自然釉（頸部穿孔部
直下か?）



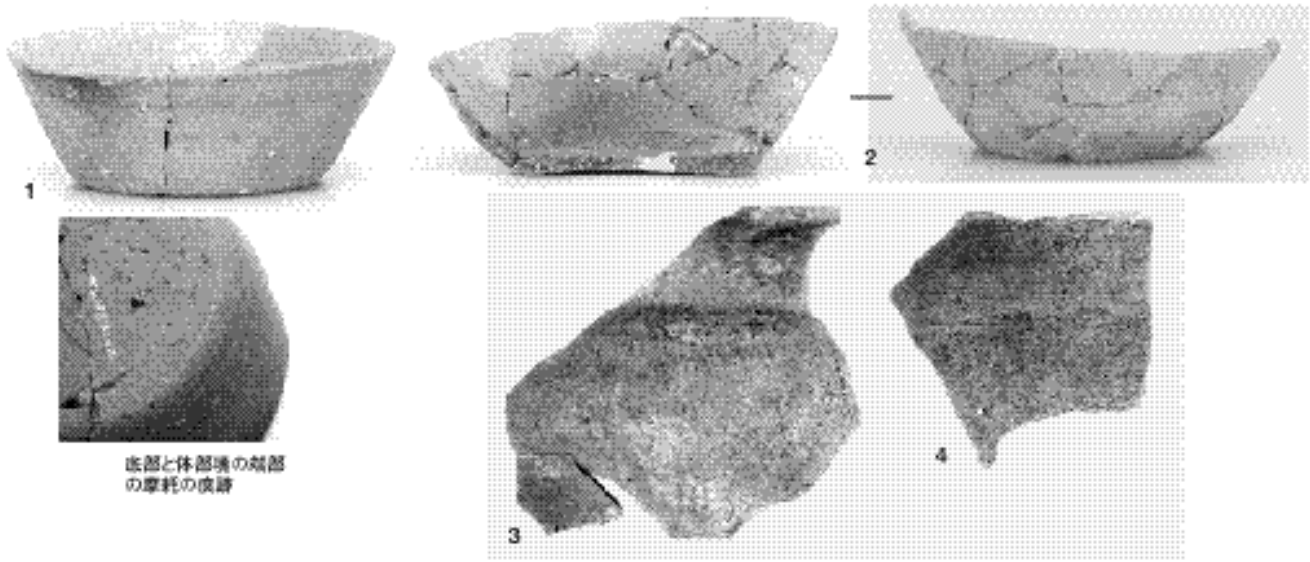


2号住居跡出土遺物

図版6



3号住居跡出土遺物



4号住居跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちばしいさむだいいせき
書名	千葉市居寒台遺跡
副書名	平成16年度調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	長原　亘
編集機関	財団法人　千葉市教育振興財団　埋蔵文化財調査センター
所在地	〒260-0814　千葉市中央区南生実町1210　TEL 043-266-5433
発行年月日	西暦2005年３月31日

ふりがな	ふりがな	コード		経緯度		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	20040517～	596.88㎡	宅地造成
居寒台遺跡（いさむだいいせき）	千葉市花見川区（ちばしはなみがわく） 浪花町（なにわちょう）981-1･2	12104	花見川区-130	35° 39′ 23″	140° 04′ 21″	20040616		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
居寒台遺跡	集落跡	縄文時代	土壙　1基	石鏃	
		古墳時代	竪穴住居跡　3軒	土師器・須恵器 土製品・石製品 鉄製品	白玉が胎土に混入した土器が出土（1号住居跡）。
		奈良・平安時代	竪穴住居跡　2軒	須恵器・土師器	
		時期不明	土壙　1基		

千葉市居寒台遺跡

平成17年3月31日発行

編集・発行　財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター
千葉市中央区南生実町1210
TEL　043-266-5433

印　　刷　株式会社 弘報社印刷
千葉市緑区古市場町474-268　ちば印刷団地内
TEL　043-268-2371